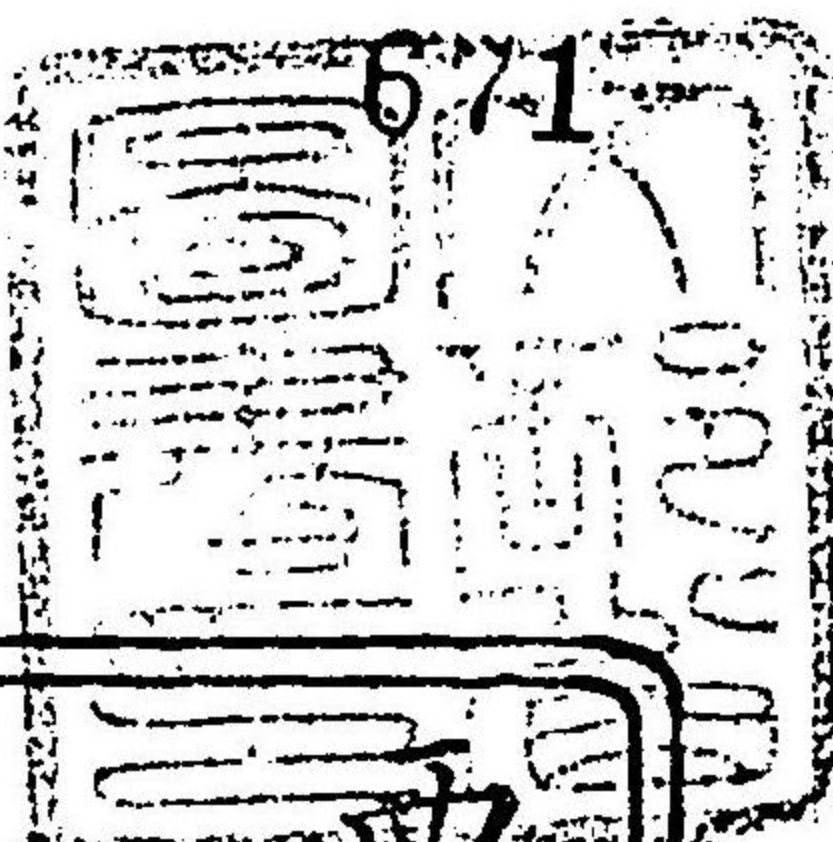


特31

671



西洋新書四編序

瓶梅三五笑々言りも坐し相対を偶容りり徐よ  
一本を出しと語多ハス久此書既に世小行り多  
三編お及多し而し多其二編足下の序を多し  
あり今此編工成將お發兌せん手如何多  
序か多しを依て復亦足下よ需む如何余受て而し  
之と閱すれハ乃ち筆と佛國お轉し而しその景况

西洋新書

四〇

准官

瓜生先生編輯

西洋新書

全部 四編

東京書鋪宝集堂發兌

官 准

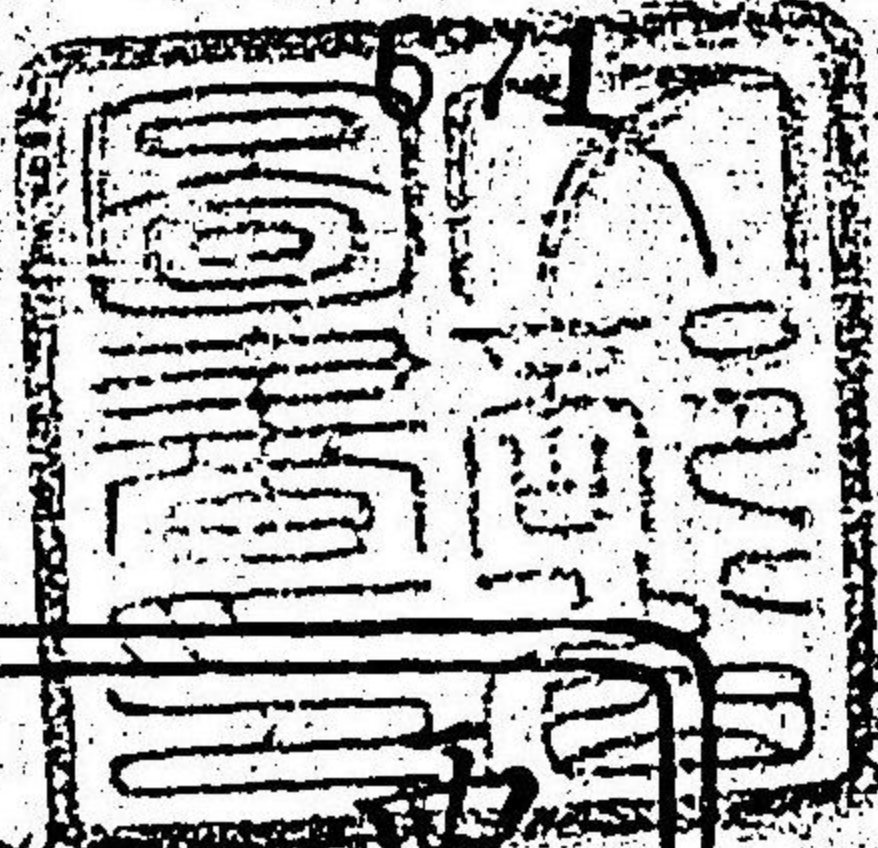
瓜生先生編輯

# 西洋新書

四部 全部

東京書鋪室集堂發兌

特31



## 西洋新書四編序

瓶梅三五笑々言のや坐一偈相對を偶容り徐よ  
 一本と出しく語をいふは此書既に世小行り多し  
 三編ふ及多し而し多其二編足下の序をよむる  
 あり今此編工成將ふ發兌せん守如何多  
 序か多しを依て復亦足下を需む如何余受て而ん  
 之と聞すねら乃ら筆と佛國を轉し而し多の景况

近古の攢族一治亂の蹟盛衰の運眼を經る  
毎月歴々又更に新なるを覺ふ以為是新  
書能名らる所以乎則置て而一傳謂く曰く  
凡如此國を轉し事易へ終り以て全洲に  
及べ則之を讀むも終夫是或る其壤に  
跋跡も多乃思ひを為す乎余常り  
海小航一傳一見を辨るゝ夢寢も茲に

數年而一傳を志を逞むを得る能  
是を推し一人を察も多不蓋又同一情  
あり難ん乎ハクもや如此書を讀むに於て  
讀み而一傳憾を遣んと欲まは却て憾  
生し讀むれば則此憾を生も思ふを知らず嗚呼  
已矣哉客曰足下何を以て且序を存し欲る所  
何哉余驚き且笑て曰く思念未と序不至らざる

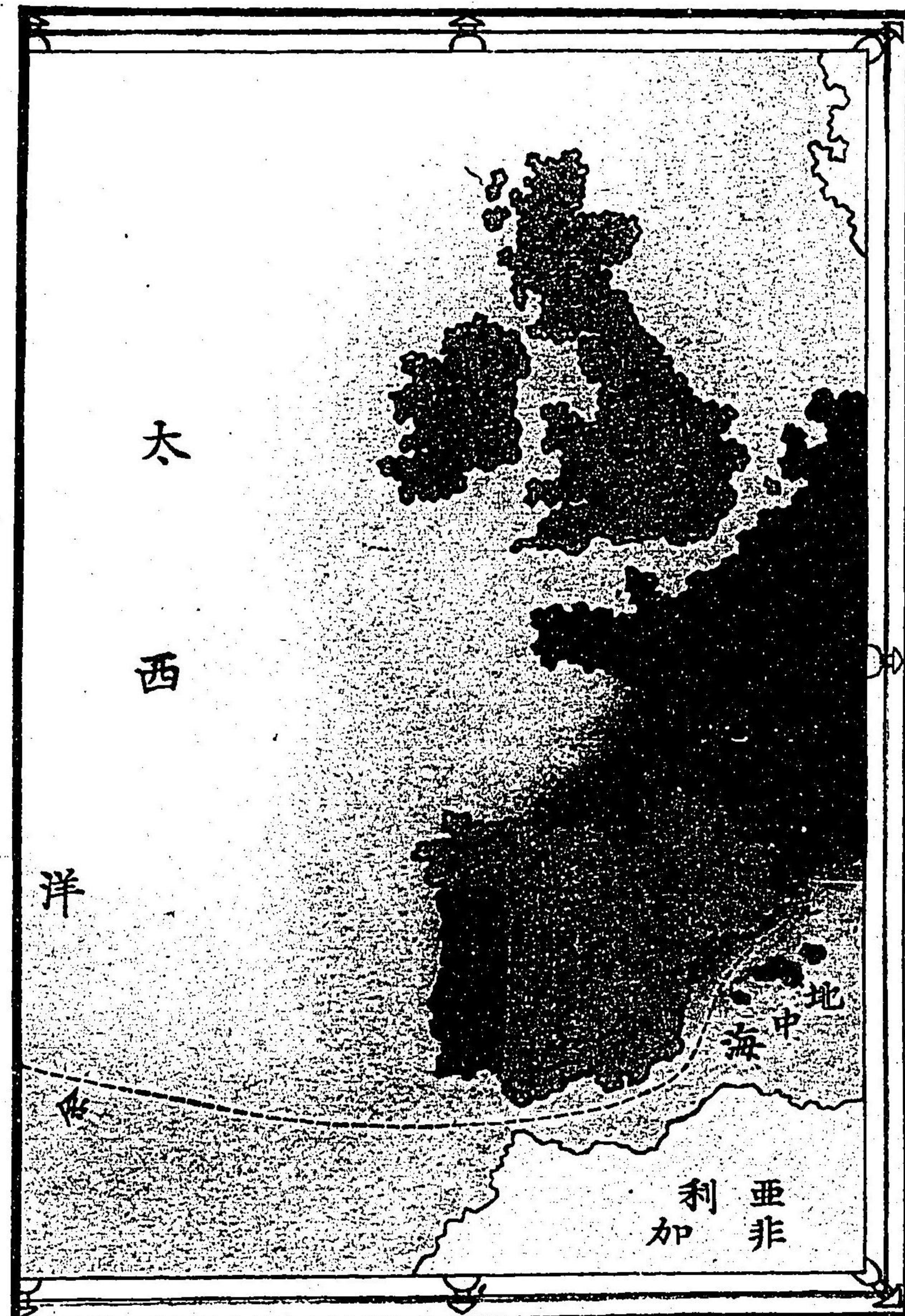
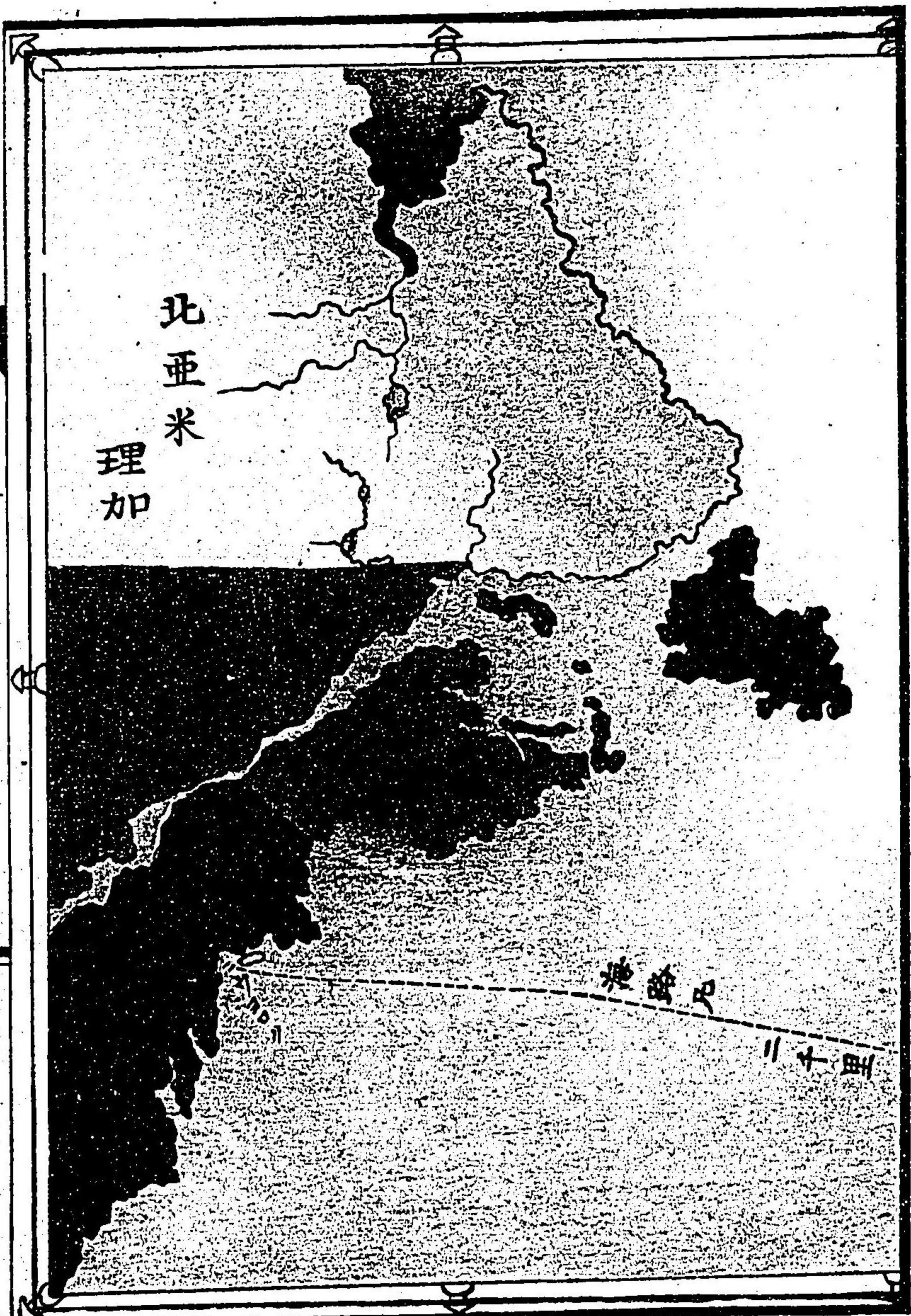
多孝唯痴を語りて若楚禮序ありて則言ん  
と欲る所ありて幸よ恕きよ假令之を作らば竹頭  
木屑の文より過き且人の嗤嘲を如何せん無きも  
亦妨りなきを羅丹々欲を容曰え先より諾し今  
辞を其所以を以て遠來豈是下終痴を  
聞て命を欲せ并哉則謝すいりて夫是瓜生氏  
の著縷々絶えはし借余の序言先絶の真

耻辱しや雖是枝と折れ類ありて  
然らば則如何と欲き多乎止むを得んは  
則此事を書し以て序ふ代むと欲き如何  
曰え是も又如あらん乎則書し以て與ふ容一喙  
し去る

橘 茂誌

干時癸酉第二月





○上の巻 目録

- 歐羅巴と言の説
- 西洋船相圖の説
- 拿破崙生立の説
- 哥羅王誕辰日の説
- 拿破崙巴黎期の軍学校に入る説
- 同芝居見物の説
- 同初めて戦功と彰す説
- 同黎昂府の説
- 同巴黎斯の説
- 同家税の説
- 馬塞里港の説
- 學校入費の説
- 拿破崙學校小在る説
- 同一揆の討手小向の説
- 同馬塞里府市中の雜説
- 同雜説
- 同十七城の説
- 同人員の説

- 馬猫の数の説
- 馬車の説
- 王宮の説
- 威爾塞列宮の説
- 文庫の説
- 博覽會場の説
- 病院の説
- 魚價高直の説
- 劇場の説
- 料理茶屋の説
- 新聞會社の数の説
- 羅卒の説
- 噴水の説
- 博物館の説
- 凱弓の説
- 旅店の説
- 畜魚場の説
- 禽獸園の説
- 遊女屋の説
- 茶珈琲の説

○下の巻 目録

- 風呂屋の説
- 婦人大袴の説
- 巴黎期中雜説
- 拿破崙西亞へ攻入る説
- 同敗軍の説
- 同エルバ島へ配流の説
- 同再度佛蘭西の帝位へ昇る説
- 同拿破崙再配流の説
- 同未前と察する説
- 通計五十二條
- 日耳曼列國と戦ふ説
- 髮結床の説
- 寺院參詣の説

Tribunal de Commerce.



裁判の所

glise de la Trinité.



寺院

Palais du Luxembourg.



館

Palais Royal.



館

VENTE PARTOUT  
ACHILLE HAURE  
EDITEUR  
18, rue de la Harpe  
PARIS.

Palais de Industrie.



館

佛都巴黎斯

愛ふ出まら直經二十五分の曲物の中へ入れらる小園よりして松田善八子






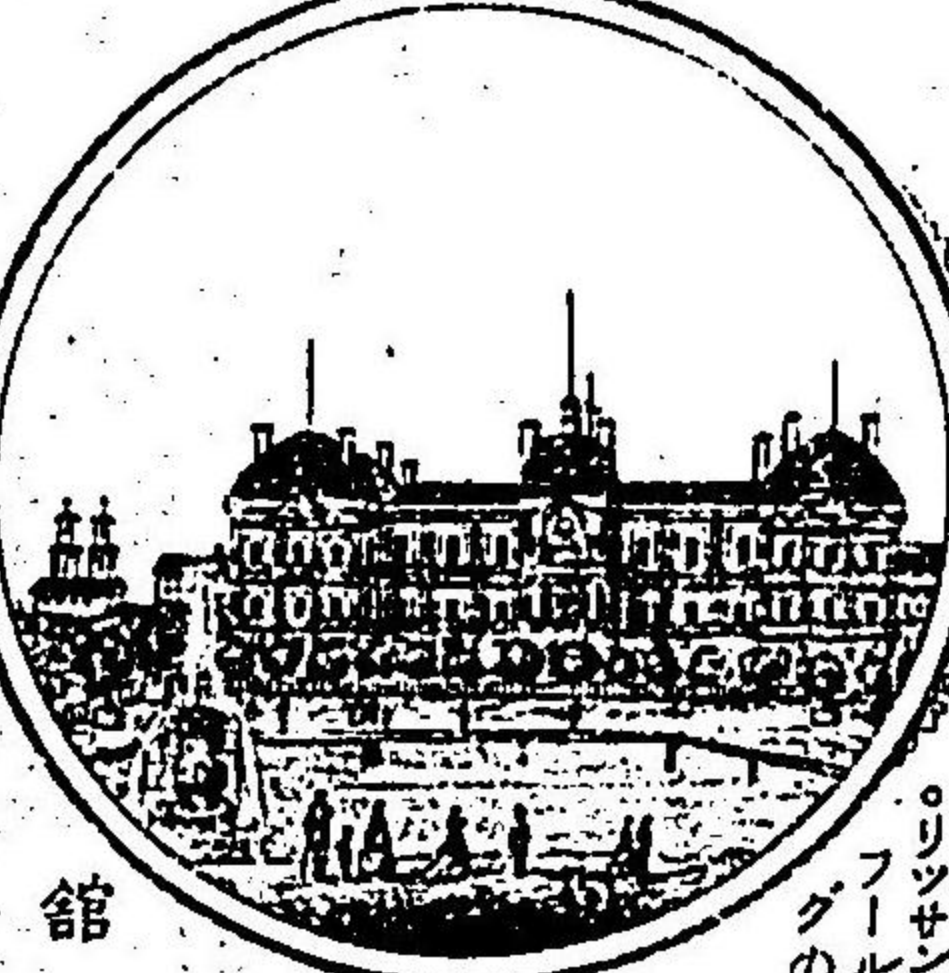





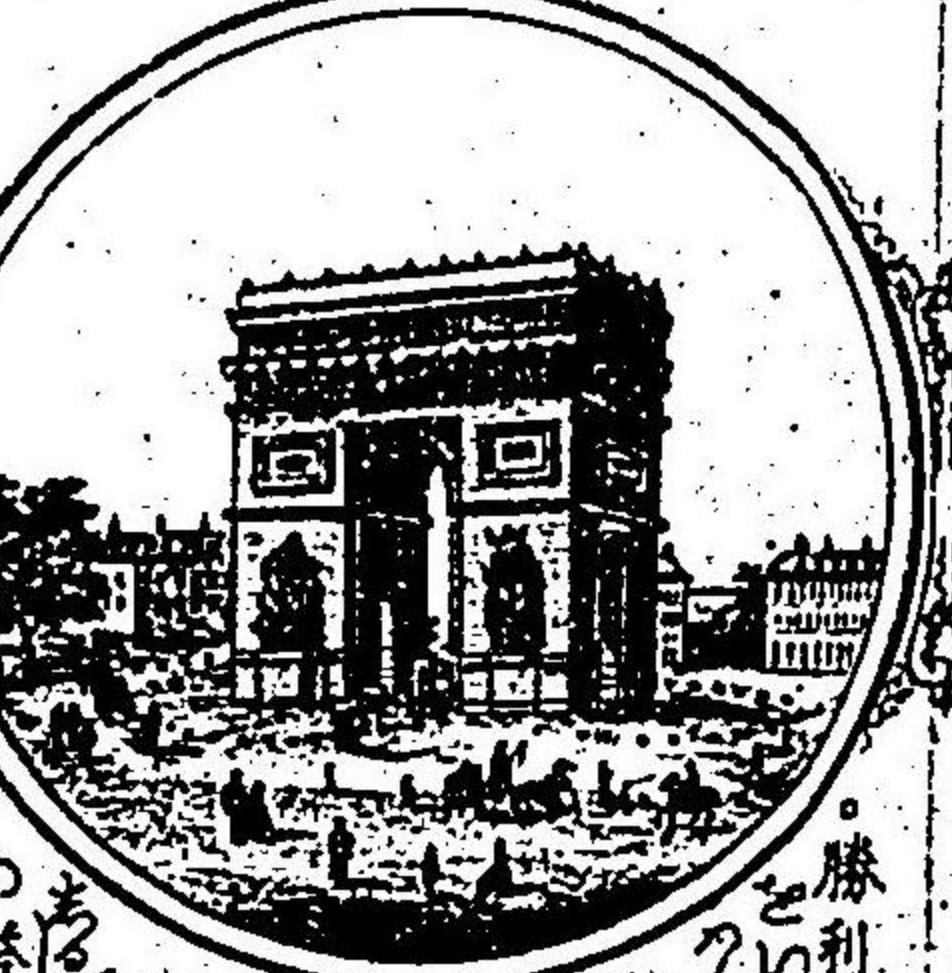
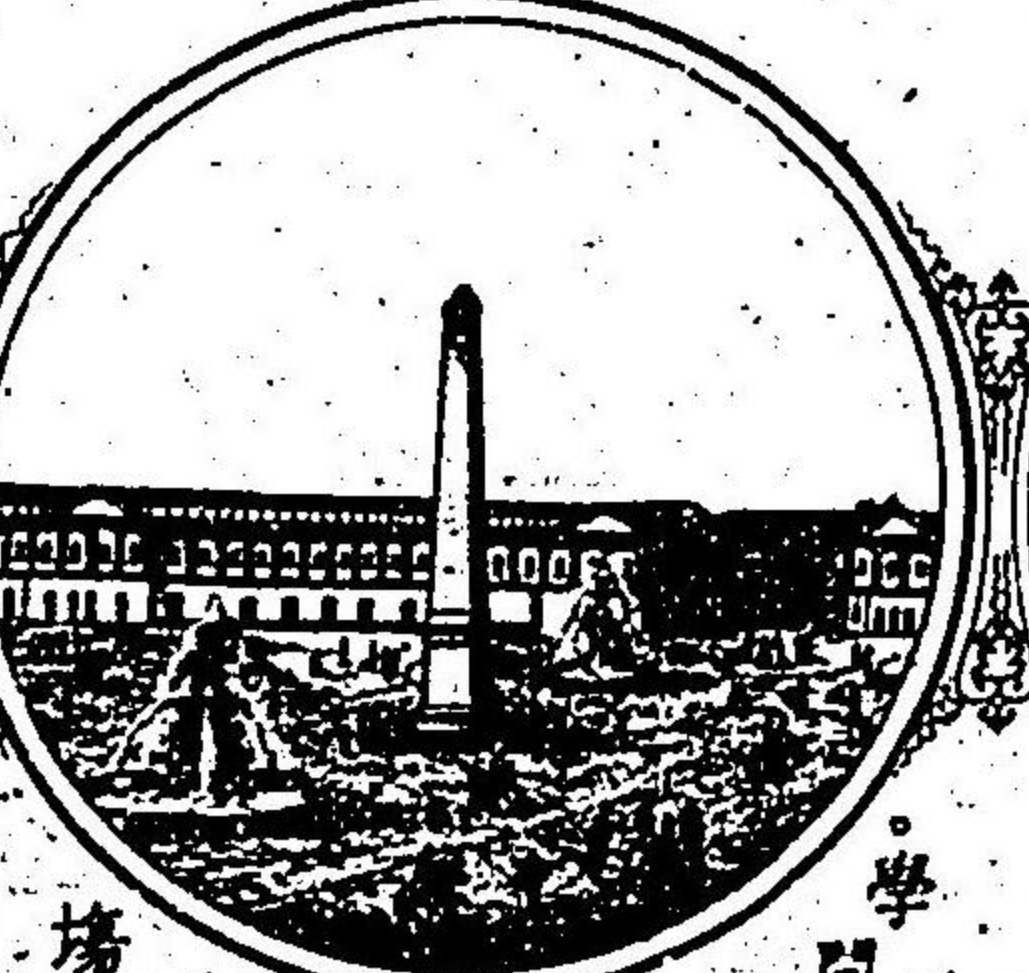
東京 慶井堂門人 大村實峯銅形

佛都巴黎斯  
名勝一覽

案内者  
多く巴  
黎斯  
一覽の  
樓中  
あり

NE VEZ PAS  
L'EXPOSITION  
LES GUIDES CURIL  
PARIS  
EN POCHÉ.

爰ふ出まら直經一十五分の曲物の中に入れらる小園よりて松田善八子  
佛國遊覽の戻り求め来りし巴りす土産なり此府の條せりのするをり倭俣  
ふ子より是を贈られられん其俣を銅板に模して口繪りあ

<p>Tribunal de Commerce.</p>  <p>裁判 の 商 人 の 交 易</p>	<p>Eglise de la Trinité.</p>  <p>三 休 の 寺 院</p>	<p>Le uveau Louvre.</p>  <p>美 術 館 の 名 所 巴 黎 中 心</p>	<p>Eglise de la Madeleine</p>  <p>レ テ の 寺 院</p>	<p>Nouveau Palais de l'Exposition</p>  <p>巨 大 の 博 覧 會 場 見 る に 上 り</p>	<p>NE VEZ PAS L'EXPOSITION LES GUIDES CURIL PARIS EN POCHÉ.</p>
<p>Palais du Luxembourg.</p>  <p>館 の リ ン サ ン グ ル の 庭</p>	<p>PalaisRoyal.</p>  <p>王 の 庭</p>	<p>Palais de l'Hotel de Ville.</p>  <p>市 の 中 心 の 家</p>	<p>Palais des Tuiler</p>  <p>織 物 の 博 覧 會 場</p>	<p>La Bourse.</p>  <p>商 人 の 小 屋</p>	<p>Le nouveau Opera.</p>  <p>芝 居 の 場</p>
<p>VENTE PARTOUT ACHILLE EAURE EDITEUR 18 rue de la Harpe PARIS.</p>	<p>Palais de l'Industrie.</p>  <p>館 の 職 業 の 博 覧 會 場</p>	<p>Vue extérieure de la Gare de l'est.</p>  <p>東 カ レ の 塔</p>	<p>Arce de Triomphe ed l'étoile.</p>  <p>勝 利 の 塔</p>	<p>Place la Concorde.</p>  <p>博 覧 會 場 の 前</p>	<p>Palais du Corps législatif.</p>  <p>議 事 の 場</p>

東京 慶応堂門人 大村實栄銅彫



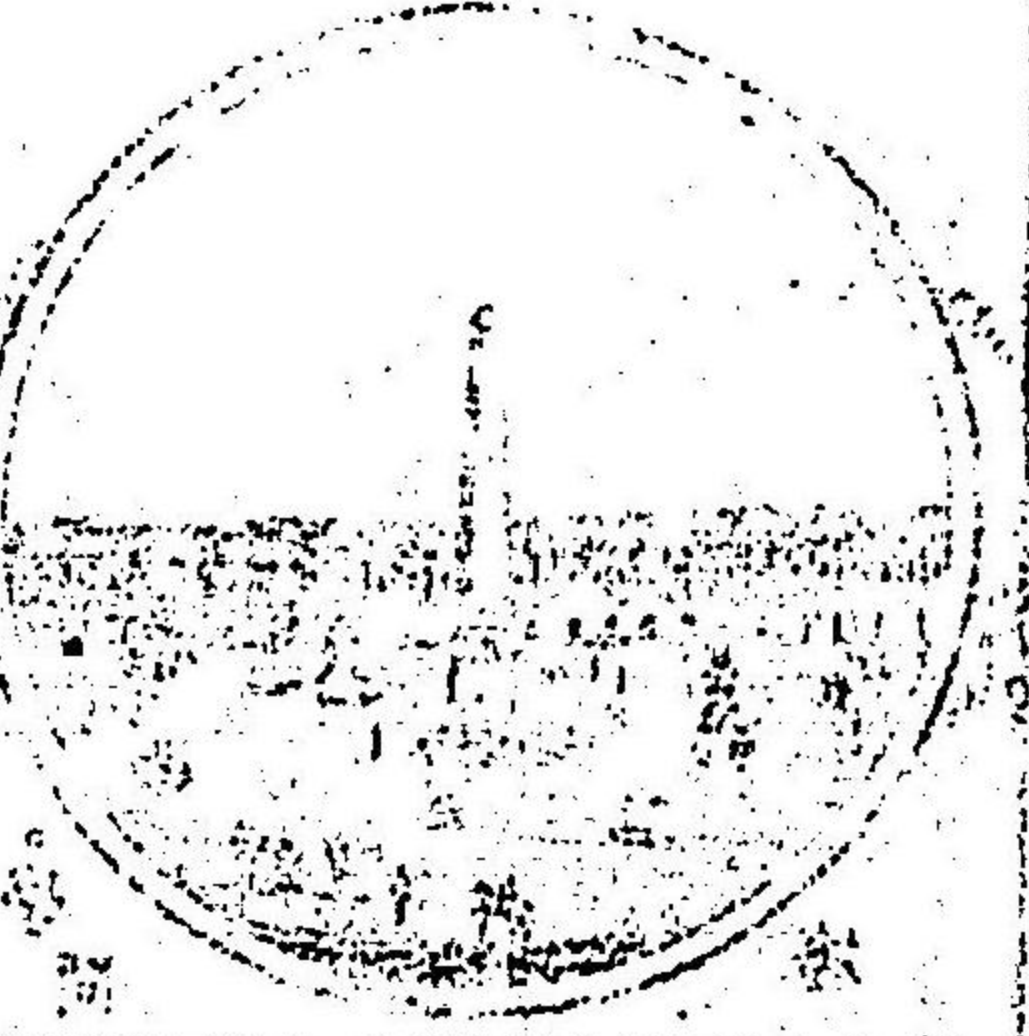
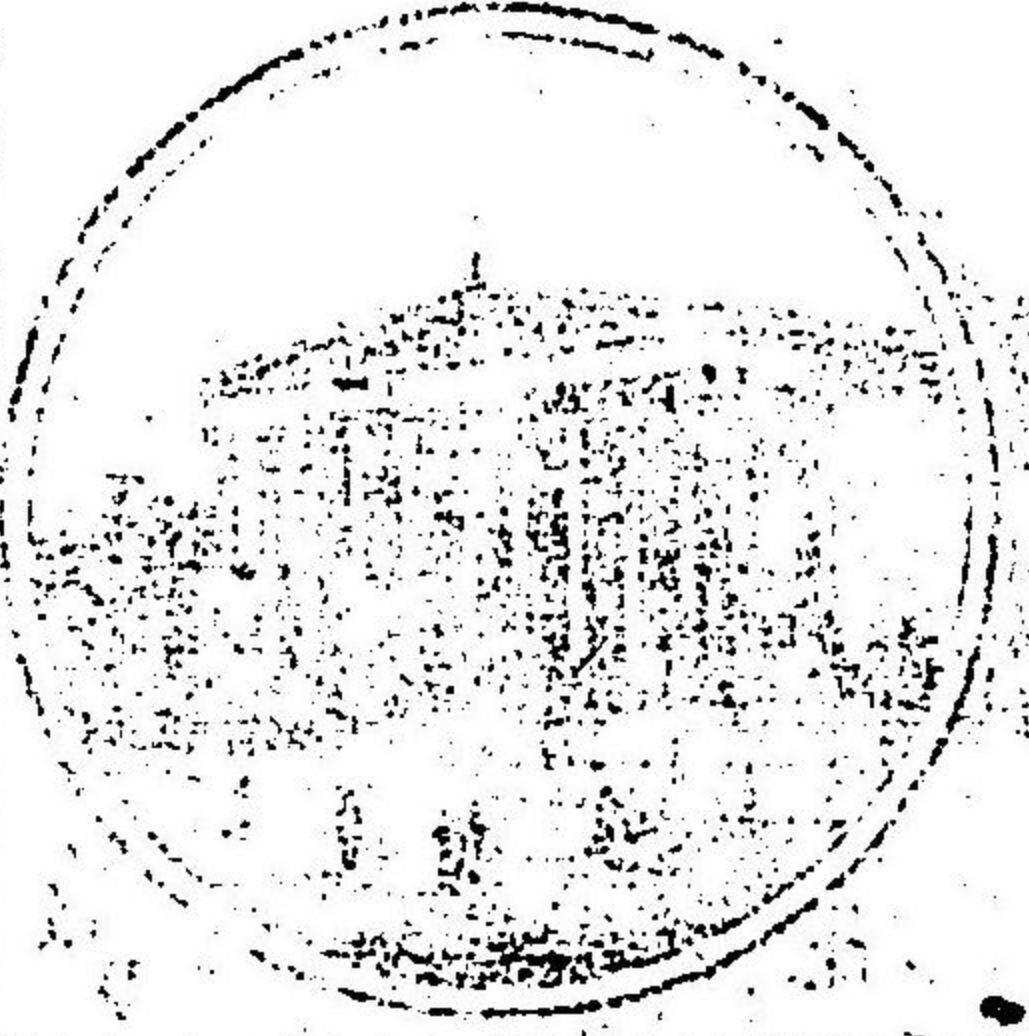
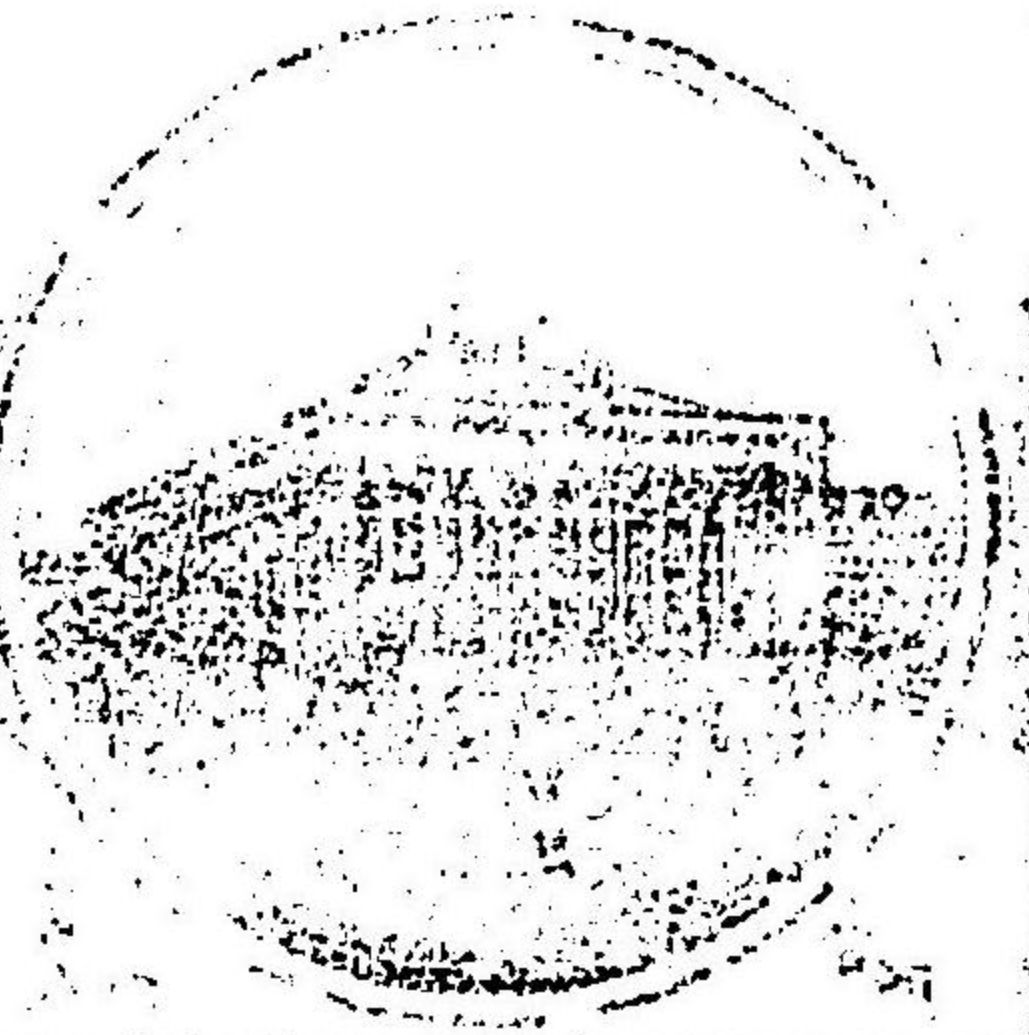
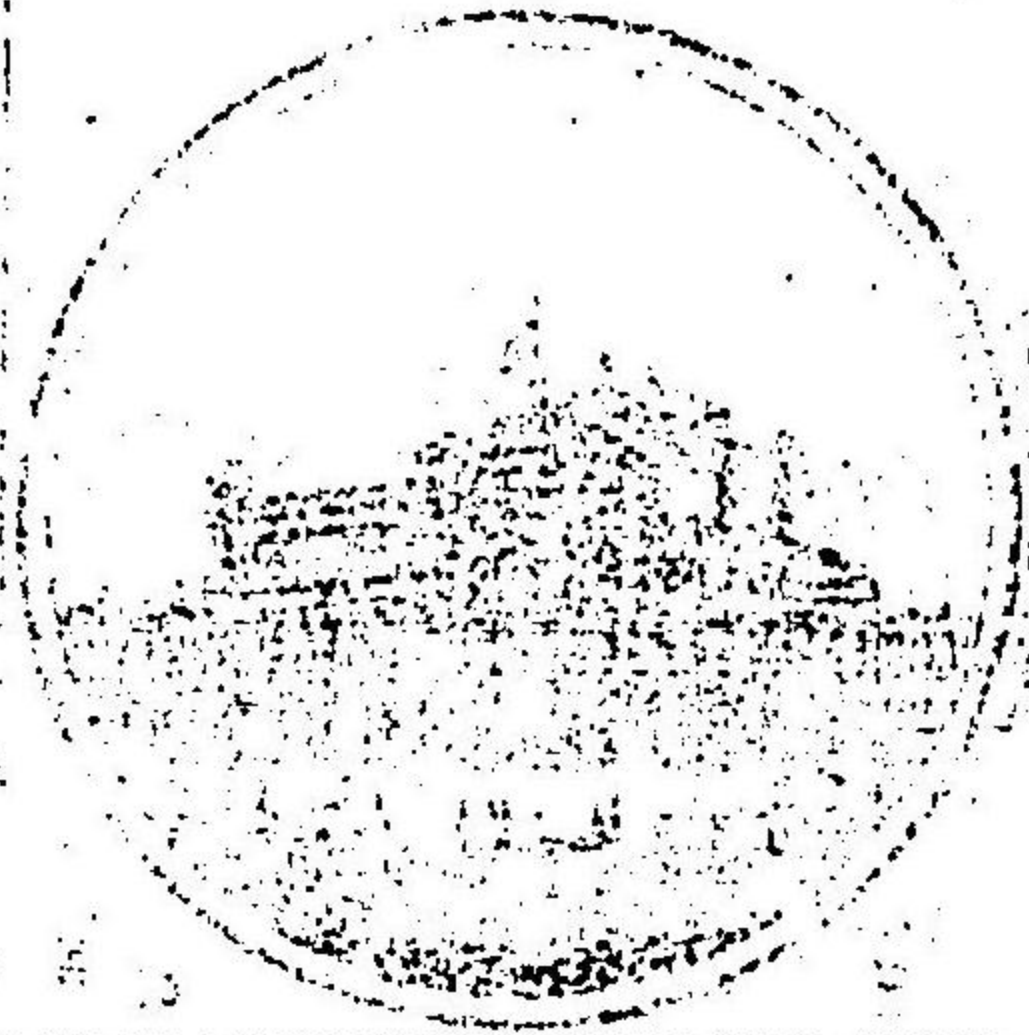
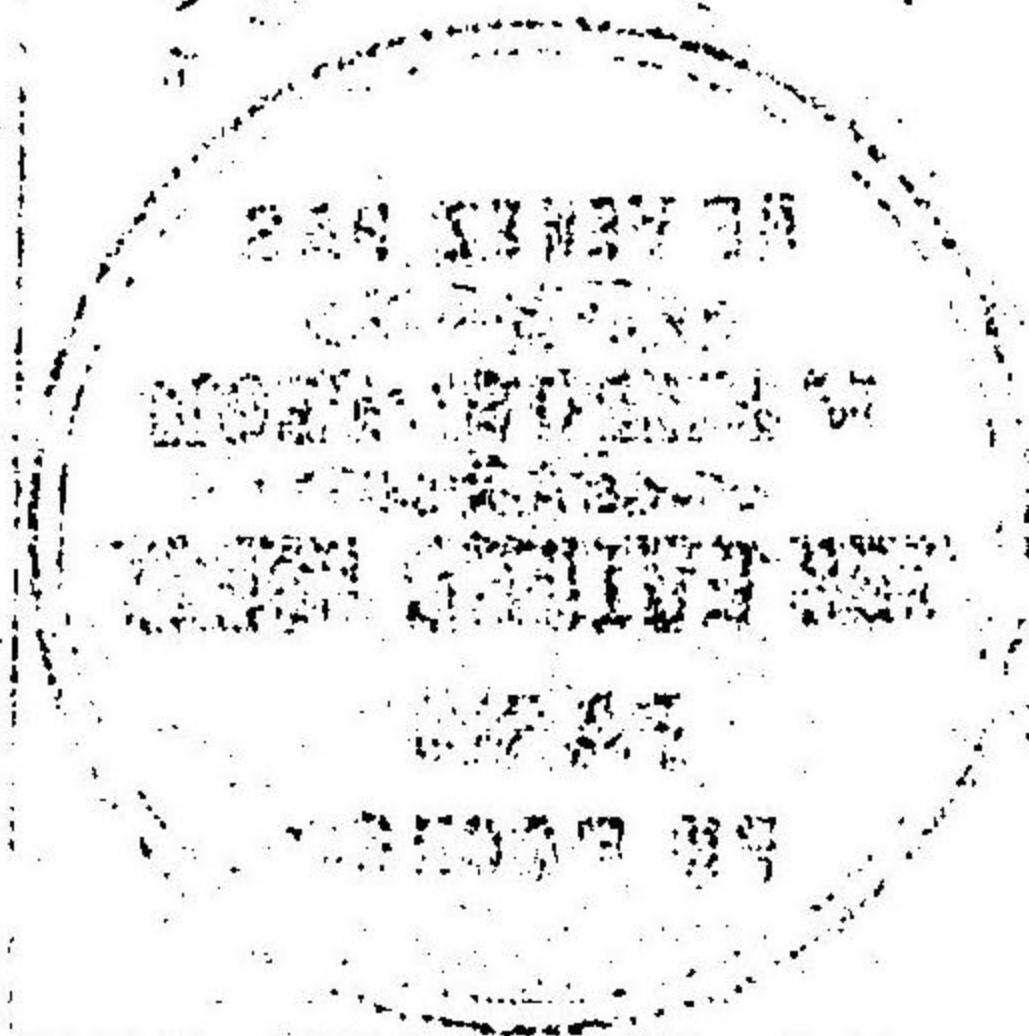
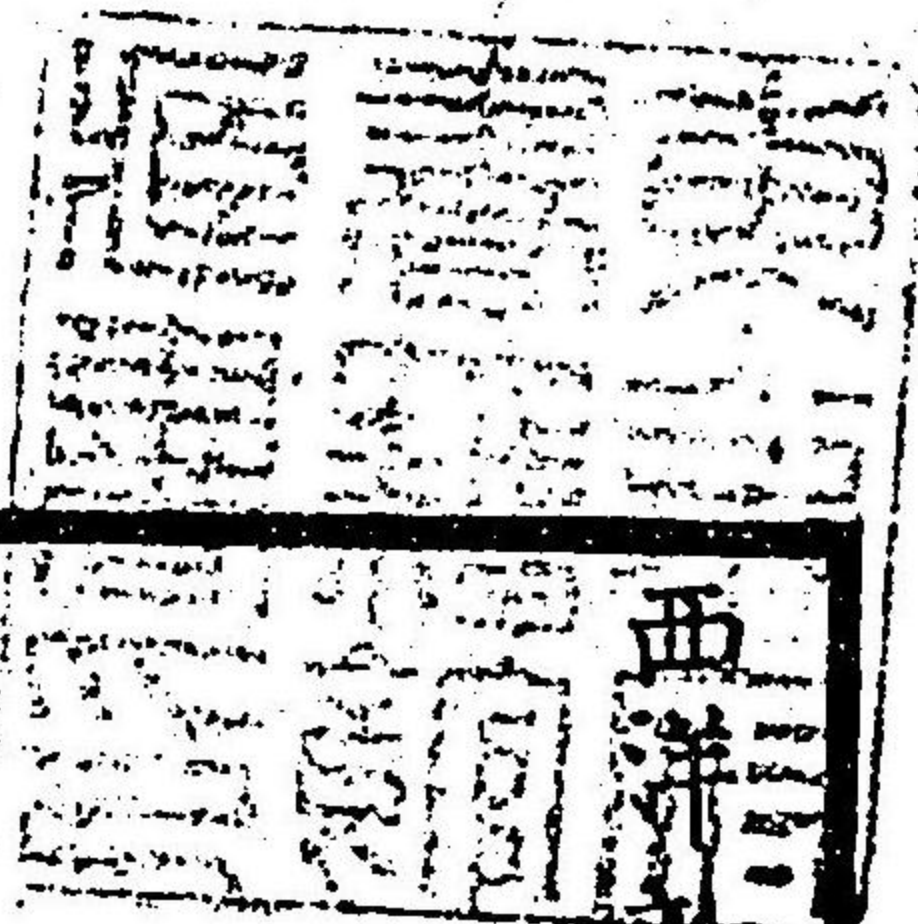
西洋新書第四編卷之上

東京 瓜生政和編集

○歐羅巴と言の説

歐羅巴ハ往古の希臘國の帝都の名ヨリテ府城の宏壯  
をさるもの多し人民も繁昌多し故に府の近隣ハ言  
ゆさるる遠く那多里亜埃及國と云へば併して歐羅巴  
府の前後戎里の地と云へば爾來近傍の土人、其  
花名と喜び遂に通称して園州の總名と做せりと云り  
まゝ一説ハ大古のとき希臘國帝の第二の王子一人の

西洋新書 第四編卷之上



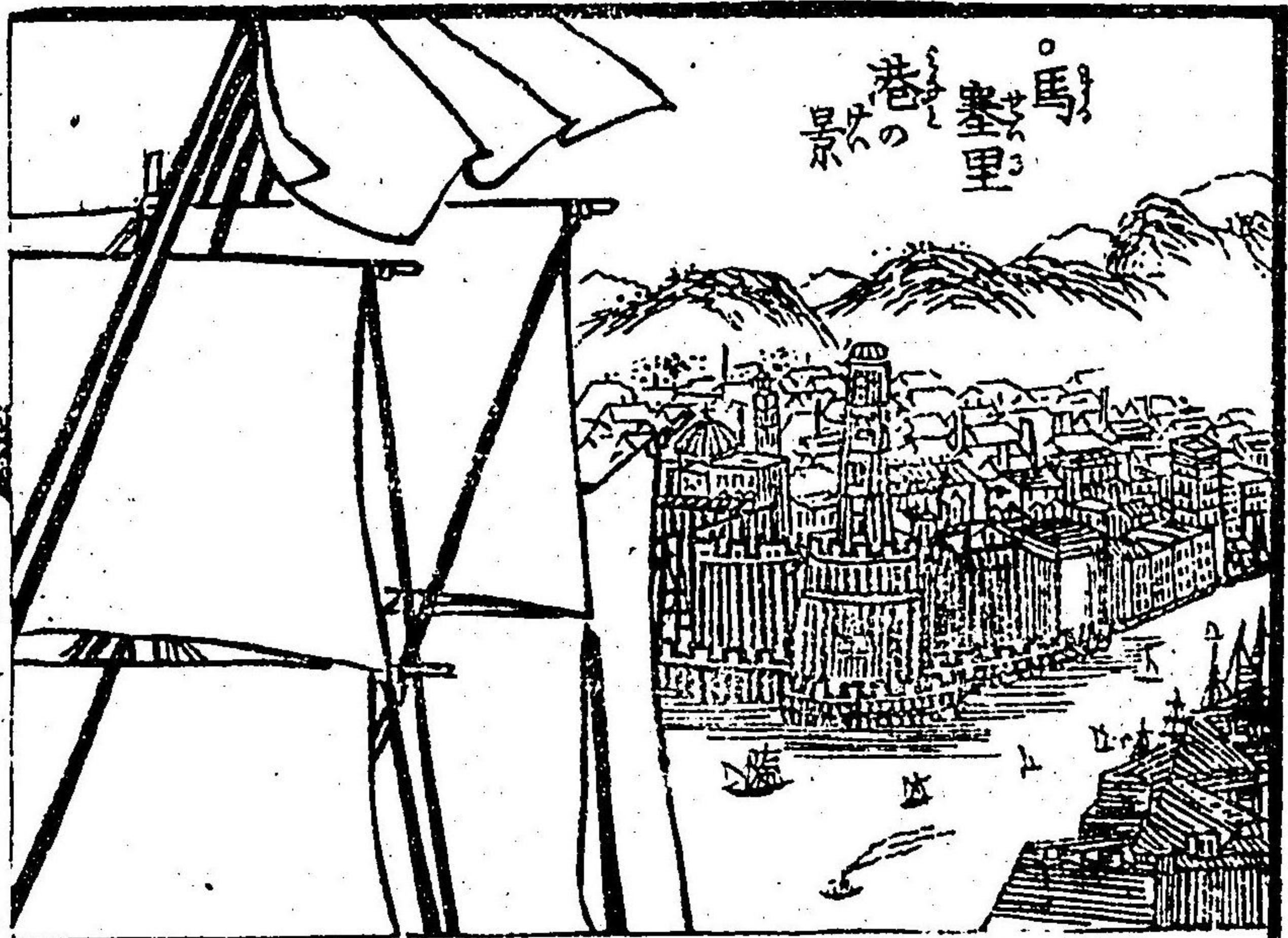
婦人と誘つて此地に走る婦人絶世の美ありて閉月羞  
 花の顔あり名を歐羅巴と号す王子常小婦とて歐羅  
 巴歐羅巴と呼ぶより畢ふその名を採りて終焉の銘小  
 負するともあり是に附會の戲言に似たりとも我朝  
 既小前證あり

景行天皇第二の王子日本武の尊東夷征伐の折より  
 碓日山の嶺より東の國々を下り觀て暴風のぬふ相弱  
 の海底に身を投じたる橘媛と思ひひいて給ひ嗟嘆小堪  
 えが吾孀息と三度宣ひより日本の東弱として  
 吾妻と稱するの名号あるを忘談ありとも証あり

らん

歐羅巴の中にお大國と以て稱する國六つあり魯西亞英吉利  
 普魯士奧斯利以太利佛蘭西とあり是と歐羅  
 巴の六強國ともいふ今爰に説とつものハ仏蘭西國の  
 都府の二ありて一國西南に海に臨み異と東に陸に  
 連り北に海と陸とを半接する國の廣さ東西二百七  
 十里余南北二百四十里なりとて土地豊饒とありて  
 北の方の閑墾する届くもの米を用ひざる故水田に  
 なる畠をよりふりて麦を作るとりつとも多し然とも我  
 國に比較ば地味大い小劣り英吉利に對するは十分肥

沃とのふべきまり度数の大概我北海道の地は類すとくども  
 割よりハ氣候温和ふりて氷封ぢ雪の降とまると少東洋  
 亜細亞の諸島我日本をどよりけ国へ渡ふハ亞細利加  
 島中のアレキサンドリヤ港より地中海と越へて同国「フロバ  
 ンス」の地の中の馬塞里港に至るまりけ港ハ地中海の北の  
 岸仏蘭西よりハ南の岸に當る羅尼の河口の近傍にありて  
 氣候ハ日本の東京より少寒一三階四階より六階七階  
 小至るの人家入江とて一抉んで建連り寺院の高塔雲  
 と凌ぎ遠近に突立り市街ハ基盤目道と通せり  
 人家の築造ハ前編すくハ亞米理加の中ハ説きると大



馬塞里の港の景

同小異あるのこまもハ巴黎斯  
 小譲りて爰ハ教習せす  
 人口三十万ハ一當国第三番  
 目の都會さるハ地中海岸中  
 の繁昌の地と魁と為すゆゑ  
 小仏蘭西ハも巴黎斯黎  
 昂馬塞里とてハ我國の三  
 都のめくハ言ハる東洋より  
 け国へ至るハハ印度まるとハ  
 亞非利加の辺土野蠻の地と

西洋新書 四編 三

經くのち初め馬塞里の都會へ着する故家造りの壯麗  
 市街の清潔往來の雜運商賣の繁昌すべて眼目と新  
 ずの場所あり港の入り口右の方の山上小廣大る基場  
 と構えまゝ燈臺ありて燈臺の玻璃障子の時々應じ  
 種々の色々分ち入港の船へあり場の模様を知らるむ  
 譬へ玻璃障子の色青るまの港の東の方船すくまゝ黄  
 さら西の方の波戸場都合宜しと言の相圖とるす燈臺  
 の玻璃障子の色と以て夜中港入りする船の相圖とする馬  
 塞里小限らざ西洋各國のづもの港亦ても皆同ト  
 因ふ言ふ西洋の船夜中海上へ往あひは船より彼の船へ用

夏あるとき花火と揚げ其音と光りの色とを以て彼の船へ  
 通ずる彼の船よりも請答へ花火と揚て相互の用と  
 便す益へ又旗印の上げ下げの相圖ありては船より知らされ  
 彼の船も旗印の居ごとを賣く是も答ふる燈臺の火の  
 色と分ちて諸の相圖とるす其訳同ト又航海中大洋  
 のう霧深くして咫尺と分ざるをあり斯の如きとる船  
 中よく折々発炮するあり是へ若し他の船ありても  
 さまじ往當らんとと必と爰も一船ありと言ふと  
 示すものあり  
 左の方も一連の炮墩ありて造築もろとも嚴まり港の

入り口至つて隘くその幅十七八間多るが故に此岸より彼の岸へ鉄橋と渡一人の往来と為す然れども港内出入の船路るといふ鉄の橋小車仕掛ありて船来ると橋の中をより断と左右ふ別と兩岸へ引込んで河と多るを最も怪し斯く船往すざるといふ橋より兩岸より操出しさるり人の往来と成る元のとて橋の断続とすなり溝堀の水門と閑閑すより速まりけとて鉄橋のさむいと這入るといふ港の入江大いふ廣がり大船千五六百艘も掛るべし當地へ往古希臘人の用さるるものありて二千五百年余の旧き市あるがゆゑも文学いと早くより行つと今も独り学校あり一ツの学校

小生徒五百人ほど寄宿あり居まり内女二百人と言ふは学校の生徒の一ヶ年の入用金百八十兩ぐらゐりて足るよう是は亞米理加の條下不言へるがごとく有徳多るもの助情かたきふ因てあり

日本の如き物價廉多る国の者より足るといふ一ヶ年の入費百八十兩ふては多しと思ふべけれど地奉公人と抱ゆる下男ふも一の下女ふもあと一人の給金一ヶ年小大概五十兩ふりて其ありは仕着せとあるあり歐羅巴の諸色すべて高直むるといふ髪梳錢三朱ぐらゐり入湯錢一度入り小く二朱より二分ぐらゐり至る所の物は小くは

然と生徒が一年の入用百八十両、實に些少なりて斯入費  
 廉からざるべし、学回修行するの易からざるを以て多りとぞ  
 此地諸方の学校と合して寄宿の生徒常小二千人あり  
 さまあつて通ひ、舊古の者の三千餘あり、多し三世  
 拿破崙帝の下屋形ありて、莊嚴目とあつたり、せり花園  
 小の草木の珍奇と限りも多し、植まらば鳥獸の數と尽し  
 たり、又戯場の數、呀ありて、何とも賑なり  
 花園博物館、戯場とりの合衆國、小言るもの、と其容体  
 おかよそ同、けいばけのち巴黎斯の條、下小記す、以  
 て爰ふの省く

當呀の初代拿破崙が共和の黨入り初め、戦功と頭を  
 せ、地あり一世拿破崙が事跡、人の能知るところ、多し、童  
 蒙女子のみ、おれ三と贅、く爰小記さん名へ、拿破崙姓の  
 勃那把爾的とり、ふ人へ地中海の「歌尔西克島」多し、小更  
 「カルス」勃那把爾的の次子あり、母を「ラチア」ラニマリニ  
 と言ふ、西洋紀元一千七百六十九年、今より百十三年、お  
 の八月十五日、かき、島のアヂヤシオと云ふ港、小生と、り  
 幼稚より、学と好し、學々として、意とる、とみ、然る、おけ、時  
 小當つて、「歌尔西克」の島入り、仏蘭西政府、小叛と、數回  
 戦争、小および、とと、戦ひ、利あり、貴豪とる、多し



討死せしより再び降参りて  
 仏蘭西の版圖に属するところ  
 ども仏蘭西の政事の暴虐  
 多ると惡く招き小叛んと爲る  
 の企て専らあり拿破崙の幼  
 推より是らの支と小耳をた  
 ざり我成長るさば仏蘭西人  
 と戦争して打負ひをらんると  
 常不言たり然るも拿破崙  
 幼稚しく父を亡ひ父の友の

「マルブーフと言ふ者の惠とて請齡九歳の春自ら願つてマリ  
 ヤンの地の軍学校に入りたりは學校の抜群の教師と爲り天  
 文地理測量と始め軍事の關係する學課とつとく具らず  
 と言ふとみ一因りて大い拿破崙の宿志をかみひぬ當學  
 校の節生徒百五十人あり拿破崙の同學の少年ら小對  
 一懇切なもせず疎遠なもせず然とども抱劇するところ  
 固く外一獨沈黙しく一室に籠り朝も暮も夜も閑しき  
 苦學を寐食を忘とす故に他の少年ら打集り拿破  
 崙の辺土の田舎ものごとと出りなるとバ斯的繁華の人中へ  
 来ては物に染ぬと覺えぬいざや渠と一劫たり志く抱

さんと約し一時群とる人拿破崙とてら彼方の方より罵  
 と口と鳴りて嘲呼かけとて拿破崙へ自若とて更にとん  
 着めさるる各面白からず思ひ果の徐々にと出りて小撞  
 ると始めより然とて合破崙へ黙して立し間と  
 久く年長ある者と只一勢小三人とて之突倒せば頃哉田  
 舎ものが怒りてるの押揉て仕舞と立りて悪童らと物と  
 もせず拳と揚て打らりて足と飛せて蹴返せば其騒  
 大方ならず教師も是とてつり駈付来りて制し止め  
 漸ふくみ海より然とて拿破崙が勝ると強勢ある勇れ不  
 僻易し以後の敢て進するべき成さるけとて狂拿破崙

小少せんとして少年ら打ありコルシカ島の田舎者らに激  
 腹と立のこふて甚と弱し夫故に我仏蘭西のち下ふされり  
 るとて言て嘲りけとて拿破崙き潔しとせずとて獨語や我  
 がコルシカの国とて以て仏蘭西と打負し獨立とるんと進さ  
 ありと然とて僅十三才の少年とて聞咎むる人も  
 拿破崙の古今の歴史とて好し就中羅馬の該撒帝  
 が亜細亞歐羅巴小破虐する編と土耳其の歴山王が亜細亞  
 歐羅巴を威と振ひするの傳と嗜む其人々と欽慕とて以て幼  
 稚より大志あるの証とてえりけりて学校ふく生徒が  
 子舎のおへりての地面と分ちふえけりて拿破崙勉



強の餘力よりのちから自ら樹木きよくと植うゑて垣根かきねと為なし、樹木きよく二年にんねんふりて少すくく繁茂はんまいし、騷劇さうげきと悪生徒あくせいとの入り来きると防ぶせげを因よりて拿破崙なぽれおん大い志しと申まをるひ學術がくじゆつふ工夫くわふと志しら、只ただ向むか往かう古この英傑えいけつ小勝せうしやうらんこと欲ほつり、然しかもど校内がうけいの官員くわんいん同寮どうりやうの書生しよせいらハ深慮しんよ遠謀えんぼうあると知らしらざるとバ立振たちびんまひの人ひと小異せういあると憎にくみ、誇こほり狂者きやうしやの如ごとく扱あつふも多おほり、拿破崙なぽれおん崙らんもまて是これと知しるとも更さら小頓着とんちやく為なさるり、爰こゝ小仏蘭ぶつらん西国せいこくの始祖しそ哥羅王ころわうの誕辰たんしんハ大い祭まつりありて當日とうじつハいさうの罪つみと犯かすも罰ばつするとま、故ゆゑ小學校がくがう小徒せうとの抱戲ほうげき放逸はういつと免ゆるし、且かつ十四歳じしうさい以上のものハ鉄炮てつぱうと貸かし、あ

之これ意い小祝炮しよしやうと放はなせり、拿破崙なぽれおん十六歳じろくさいありて年としの祭日まつりひハ殊こと小販はんハ一ひとく書生しよせいら銘々めいめいの庭にわハ花火はなびと揚あげ相あひ小見物けんぶつ為なさん、と催もよほし、然しかもど拿破崙なぽれおん例れいの如ごとく獨ひとり我われが子こ含あ引ひこり勤學きんがくありて在あり、生徒せいとの庭中にわちゆうハ揚あげんとせ、花火はなびあやまつて二介にけ餘ありの火薬かやくと入いり、器うつの内うちハ火玉ひだまとび入り、大薬おほやく一勢ひとせハ破やぶ裂れし、火事かじ始はりけし、居合いあせ、生徒せいとら且かつと焦こし、面おもてと燒や周章しゆしやう狼狽ろうたいあり、生垣せいげんと押破おしやぶつて逃にげ出でし、拿破崙なぽれおん庭中にわちゆうハ器うつ々々とく乱みだり、込こし、拿破崙なぽれおん崙らんとんでり、有あり、鉄てつと押おし、てあをと言ことせず、打うちをり、猛火まうかの方かたへ追返おひかえし、みり、碌ろくと

拾ひ逃往のへ打ツリと  
 是かお小沢付やうり忽地敷  
 人おおよびより拿破崙を平  
 日の温和引之事かすり  
 拳動ハ書生らが拵敵恥  
 と懲すと又我が実地の働  
 と試えんとせよあるべ嘗  
 て拿破崙が母より安否と  
 尋ねりて返書お小子常  
 小剣と横へく「ホメリユス元



の懐中へ天下と横行せんことを願ふとありとぞは時  
 蘭西政府より當学校へ監察使来り人材と拳首都「巴  
 黎斯の軍学校へ移すの事ありて拿破崙も撰み小當り  
 十六才なりて巴黎斯府の兵学校に入り翌年十七歳の  
 春軍勢の初等官「リウテナン役と成りてり拿破崙ある  
 日朋友小誘をて戯場と見物する小其狂言の「カイルムテルと  
 り大將敵国ふりち勝我国と獨立不羈とるる場お至り  
 拿破崙我を忘と然々然々「フレイペイド「フレイペイトと呼  
 たり「フレイペイドとい獨立国とありとを祝するの辞あり時  
 傍らの朋友拿破崙が衣とひき爰ハ仏蘭西王の府内あり

妄りるを奪ひぬぐと言きて拿破崙とてと云ひつと云ふ  
 ありし黙りて拿破崙リウテナンとまり屯の軍入りり  
 より哉程るくして歐羅巴總て革命の折至り時小仏  
 蘭西王ハ十五世「路易」とり人の代り篤実温原の君  
 ありて善臣下の諫と入る人を用ゆるとて規小當ると  
 りども惜いなる確呼る決断ふ乏しく且優柔の性質  
 ありて貴族僧侶下民の過激と壓伏するふ力足らず終  
 小王家の擄覆と招く小至り抑十四世路易王の末より  
 政府の奢侈甚しきより国力次第小衰へ疲と貴族僧侶  
 ら互ひ小権と恣ふりて民と忍ぶると土族の如く一加る小

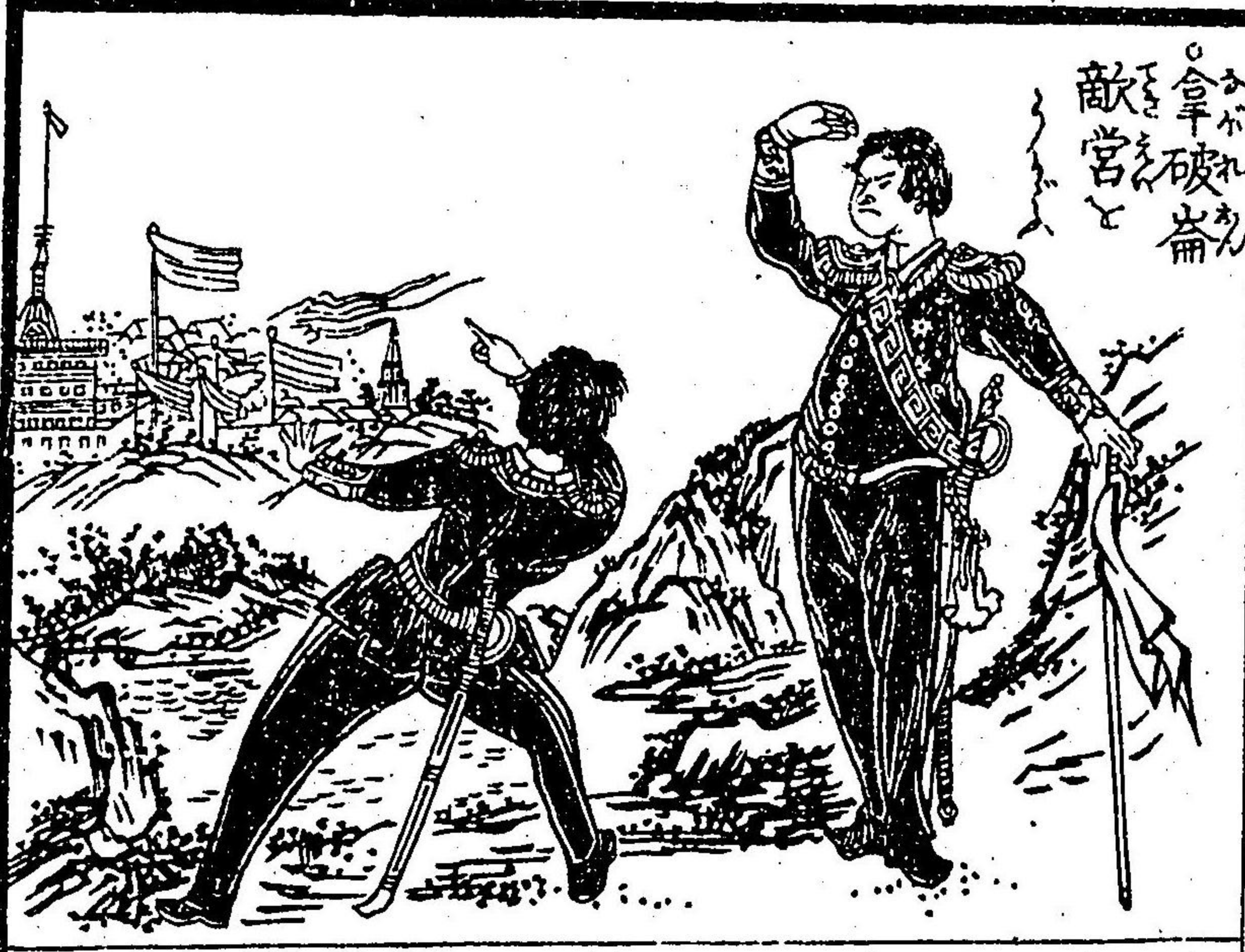
諸税銀の取立ありはじより遂小の禍乱の基と閑る當王  
 小至りいよく擾乱止り折り近より亞米理加合衆国英  
 吉利小反り獨立する小方り仏蘭西人の合衆国小扶けく英吉  
 利と戦争せりあるど英吉利亞米理加和儀あるの後国小帰  
 合衆国の議論ありてづき人民同等の説と称へる是小荷擔  
 するもの多くて弥全国の一大動乱と閑るとする故仏蘭西  
 王早く是れを法律と改め貴族僧侶平民の三等と平  
 均し共和の政ふんと欲すとて貴族ら敢て採用せず  
 終小の大騒乱と引出り成りたり然とて仏蘭西国  
 内の百姓政府の虐政と憎むより四方小奮起し英雄豪士是

と助けく所々小踊躍をりけまば擾乱殆ど昂の涌ぶてくるり  
 拿破崙のわねて王家と恨るも是時くるる時来とりと勇  
 悦ぶりのうら未ど色おの頭いなり時ふグレネルと言ふ地の  
 一揆甚しとて拿破崙も一ツの大將小属して是が鎮撫小  
 向ひいふグレネルの城將一揆のさめお取圍まれ殆ど打殺さ  
 らんとおせる小逢へり拿破崙とて是て衆と駈ぬけ  
 一人一揆小向つて言ふ汝等ハ是は仏蘭西国の人ありや否やト  
 一揆らるる問と怪し各顔と見合して誓時のあひど然止せり  
 拿破崙あてい言ふ汝等仏蘭西の人ならん敵とて必らず  
 窘めド仏蘭西人の固より寛裕大度なりト一揆らけ一言

と聞より城將の困と解さ皆とぐく引去りてり嘗て拿破  
 崙意謂一揆ら実お盛んなり大丈夫事と起して成らずん  
 ば寧死して大名と遺さん我今ゆる小伎小関係らひて空  
 く其度と過さんより早く一方小割據するお若すと心忽地  
 確定し同志の友お斯のよと語りけとば友ハ拿破崙  
 除りお事小をやると危ぶこ切お是と諫めけととも断然  
 しく敷く容さず屯軍士官の率と捨て故々のコルシカ島へ  
 戻りーの二十二歳の時ありけり折とそあまは仏蘭西国郡  
 ちう巴黎斯の政府お叛さ共和の政治と以て称するの黨  
 多すく蜂起し勢ひ日とあつて廣大お至りけり彼の黨

等るやも版圖を弘めんと数隊の兵と渡りコルシカ島隣国  
 の撒丁島へ討入りたり拿破崙とこれと聞ら急ふコルシカ  
 島の若者らと説得して味方おつて進んで共和の黨お  
 ち早く「マタレナ島」お押渡りたる一島を攻め共和  
 黨の屬島といふなり然れども拿破崙が兵の一時の  
 勢いお因り扇動お乗せたる集り者るさば土地と守る  
 お堪えざるを計り拿破崙の速うお人数を纏めてコルシカ  
 島へ引揚り愛ふき英吉利人の仏蘭西政府と国民  
 の隙と生ぜし費へお乗せし数艘の大軍艦とかり渡り地  
 中海の北岸たる仏蘭西「プロバンス」国の中の「ツロン」の府を政

とせけ処と抹り衆兵と屯て「ツロン」カ島と我が有ら  
 せんといふ企てりるまゝに仏蘭西の共和の輩の英吉利人の  
 暴虐ある奪掠と悪し何事とむさくも先彼奴らと追ひ  
 ありぞけ「ツロン」の地と取戻さんと謀りたりけり「ツロン」  
 カ島へ聞えりといふ拿破崙の時来りぬと雀躍りて喜び再度  
 村里の若者らと招き集り小船数艘おとりまつく「ツロン」の府  
 と僅く小三里と隔てたる馬塞里港お押せりて屯と構え  
 扣えりて「仏蘭西」の共和政事の軍勢おひき集り来り  
 英吉利勢も「ツロン」の街より早兵と操りて殆ど戦ひと  
 接へんとす拿破崙が向牒ともらて「ツロン」の人民の事情



拿破崙  
敵營と

と探る元より英吉利人  
心服せしむらず力足らざる  
以て従ひし者多しと聞  
察し違はずとて竊る  
彼の地ふおもむき其頭  
人々説破せしむ拿破崙論  
ふ伏従し英吉利叛きて味  
方ふ帰する者多しと  
然れども共和の軍長らへ  
破崙が若年あると怪蔑更ふ

用ひんとるものありて  
ひき安然なる風情とほ夫が  
将らのツロンの人民おひ  
英吉利兵の海賊あり船軍  
拙くしく相手をし不足ら  
るど大いお是と怪蔑ら  
めりけし英吉利が之聞え  
兵を向よとて数隊の軍と  
あひつ早戦争とるり双方  
海の波の音とわびし道  
用ひんとるものありて  
ひき安然なる風情とほ夫が  
将らのツロンの人民おひ  
英吉利兵の海賊あり船軍  
拙くしく相手をし不足ら  
るど大いお是と怪蔑ら  
めりけし英吉利が之聞え  
兵を向よとて数隊の軍と  
あひつ早戦争とるり双方  
海の波の音とわびし道

仏蘭西勢英吉利勢と経茂せし不似ず先陣ふひ討  
 崩さる二陣三陣ひさつりて色ゆき渡り稍惣敗軍とらん  
 とす拿破崙の遙後陣ふひささかり我が一隊の兵と纏め  
 まり更つて扣えし時至ると自ら先不すと勝勝する  
 英吉利勢の横合より小筒の巢口と一列お拵え勢ひ猛  
 打蒐く須史の間おそのと破り遁ゆ敵お追すがつて英  
 兵お二のちと次せず將基例しお討崩する進退の速る  
 兵士の奔炮の烈しき朔風一朝霜葉と巻の勢ひあまらざる  
 不勇し英吉利勢も次第とてお追捲らるる解易るる体  
 不氣と得て今も逃る仏蘭西勢取て返し奔炮するに

盛んをば英吉利方や勢ひ尽惣敗軍とるりツロン府  
 さく逃出す拿破崙が我が一手と引さ控おひすがらく少  
 も緩めず英軍がツロンの本営へ附入りお攻め英軍爰  
 も止り得ず潰刃とさく敗走し船へ乗りてぞ逃失然  
 け度の戦争共和の軍勢らすお敗軍すべしと守り  
 返し英軍と討のこみらずツロン府と只一戦お取戻せ  
 へ全く拿破崙が働さおて其勲功最も大いなる人々初  
 めて我が黨のうちに不豪傑あると知り拿破崙の英名を  
 不赫灼るる故お馬塞里と以て拿破崙が戦功さへよの  
 旧地とおせり帝の傳記いと長し尽く記さるる看官の捲ん

西洋新書 四編之一 廿四

とてある因りて暫時筆を止め亦因ある所至らば瑣々  
しくとも再度説べ

王命府の馬塞里より三里ほど東方におありて  
地中海の北岸小市街と稱さ人口おおよそ九万お充つ  
造船局製鉄場と小盛ん小行をも蒸気の大艦鑛甲  
の船とらひ皆その地より造りゆへに因りて仏国の海軍  
場の當府と以て魁と其盛大なるの英國にお譲らるる  
ところあり

け港の東洋諸島への要地ゆゑ飛脚船の出入絶つと  
多く交易とお繁昌なり當所の波戸場ハ船より物

と揚る小岸へ鑛の杭と建杭の上下へ車と仕掛杭の上の車よ  
り綱と下げその綱のまゝへ徒あるは篋の積る物と付かさ  
斜小船の上へ下げ是は荷物とつけ下の車とまゝへ杭のこ  
まを陸の方へむけ其荷と小田の車の上へ置とまゝ杭の  
先と海の上へまゝ綱小荷と付つて初めの如く故小河岸  
揚の荷物至つても軽く損ずるまゝ是はまゝ海  
深くして大船岸まで着るなり産物の西洋酒煙草石鹼  
香具製菓の履帽子等と上とす唐摺柑もまゝ名物  
とすまゝ是は海と隔てる歴山王の地より来船の  
ものあり當港の市のステーションある蒸気車の問屋場



より首都巴黎斯まで二百  
 里ほどふいて蒸気車一昼夜  
 小達す蒸気車へ乗る人小  
 小商人大勢来り葡萄唐檳  
 柑西洋酒「チンギヤの水など  
 賣んと進むとど始め掛直  
 ありて甚だ高し然とも蒸  
 気車すてお終せんともは  
 最初の半直段ぐらゐる小下  
 多り物と高く賣へ商人の



働らぬ内ふく仏蘭西に限らず西洋の各国とも掛並多き  
 ぬ各階分直切りて買ものためすべし當所を記すべきと多し  
 ど何とも大同小異なると巴黎期の府下の條下小譲りぬ  
 馬塞里と奔りて巴黎期へ往ふ蒸気車小乗りアルレの街  
 コランスの街とりと過ぎ五十里餘ふりて黎昂府小出るあり  
 け道左右とも畑やて山まゝ遠方小出沒せり旅人の多し  
 當府の宿屋小一泊と投ずるとい

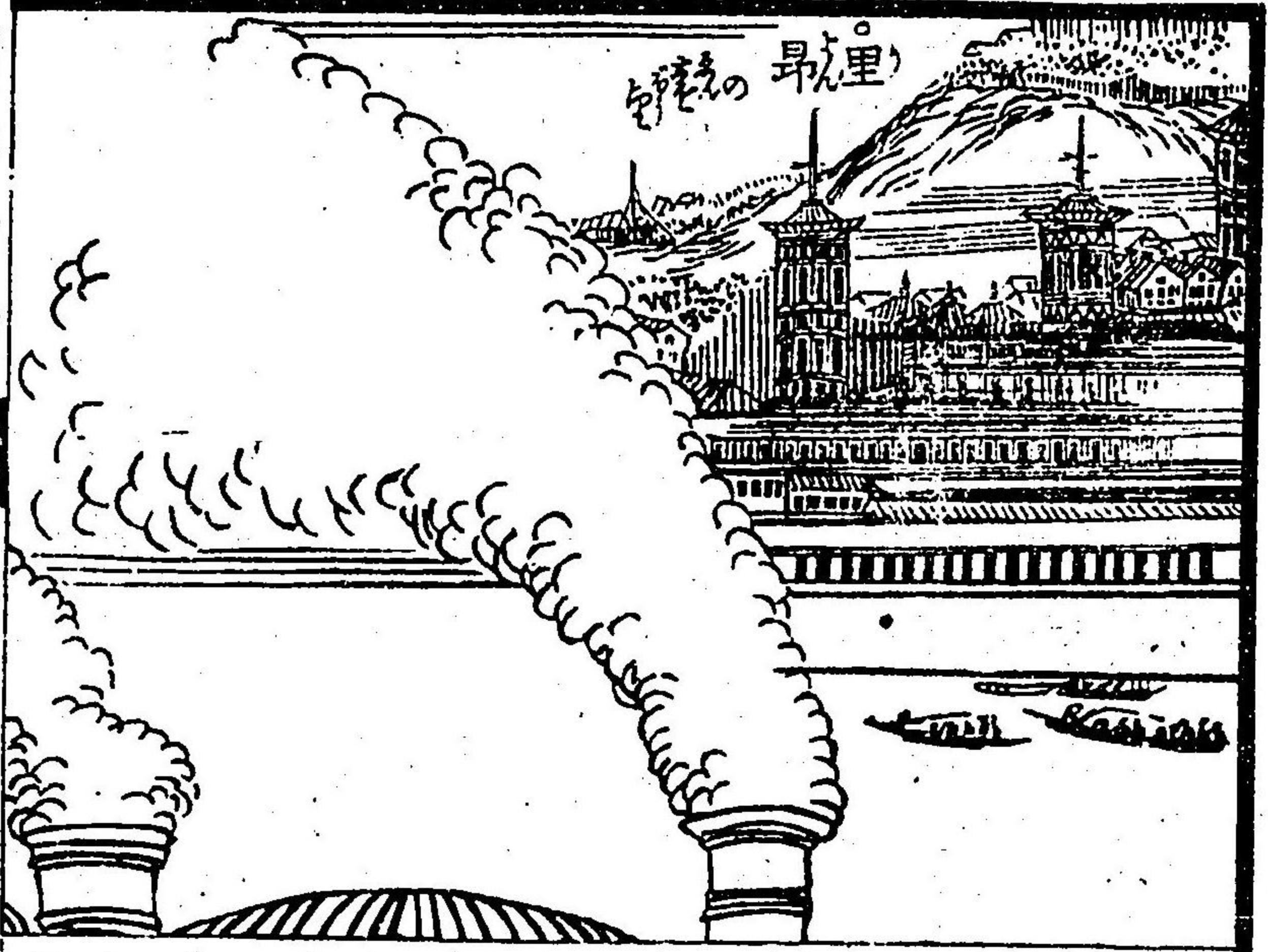
黎昂府の説

黎昂府の羅尼河と「カラン河の落合ふ所ふりて川小添ひ  
 岡小倚て家居と設け市街と基盤目小通し国内三都の

中の第二の盛都るまの人口六十二万五千餘ありて家作造築  
 の廣大市街道路の清潔まて小全備と尽しより殊小け処の  
 絹紗綾孺子とりの機織場の名所るまの製造の仕うけ  
 りつとも大りありて歐羅巴島中の第一とするより然るが近  
 来仏蘭西の地へ持渡るところの日本横濱より積出す生糸  
 も十ふりて七八分の當町へ運送するものとす其織出す花  
 籠極品のもの小至りてい小さる室内敷布どの品ありて上  
 手ある職人五六人日々の一籠おかりり五年と経て成就る  
 りのあり七年の後お出来揚るもあるあり然るまの草木の  
 花の模様鳥獸の飛るる形体宛然油繪とるるが如し

まて能人物と織出し各国の君王大臣の像まどありて工手  
 の精密と尽しよる代料千圓と出すとも得るま物あり  
 自国の勿論各国の都府おても高位有福の人の衣裳  
 小用ゆる綾羅錦繡の織物も多くる織殿より出づゆえ  
 小黎昂府の近むる來て植て蠶と作るも業とする  
 者夥し當街小の機織と職業とするもの八千人お餘れり  
 とぞけ所小廣大ある文庫あり学校病院博物院等  
 ともるる備りてまとも亞米理加以來同断るまの贅  
 せざ  
 儲るまけ所より蒸気車小乗り「マシソン」の街

と経く百四十里餘と一日より首都巴黎斯小至るるうけ  
 道渺々たる畑中より丘陵まごあり高山ありて山の  
 腹と穿ち洞穴とけ方の麓より彼方の麓へ通下 蒸気  
 車その中と往來す穴の道の短うところの四五丁長う  
 二十丁三十丁ありたる短うの燈火多く長き場ふくの間  
 毎ふランタルと用也蒸気車疾く穴の道一駈入ると  
 洞の中暗黒ふいて漆の如く俄頃ふいて山の彼方へ出で  
 日の光りと見ると夜の明なる思ひあり又遙く東北小  
 當りて連山と眺望す途中竹藪さうふらふら度の  
 我が北海道と類せりある北海道の寒さ強けり竹



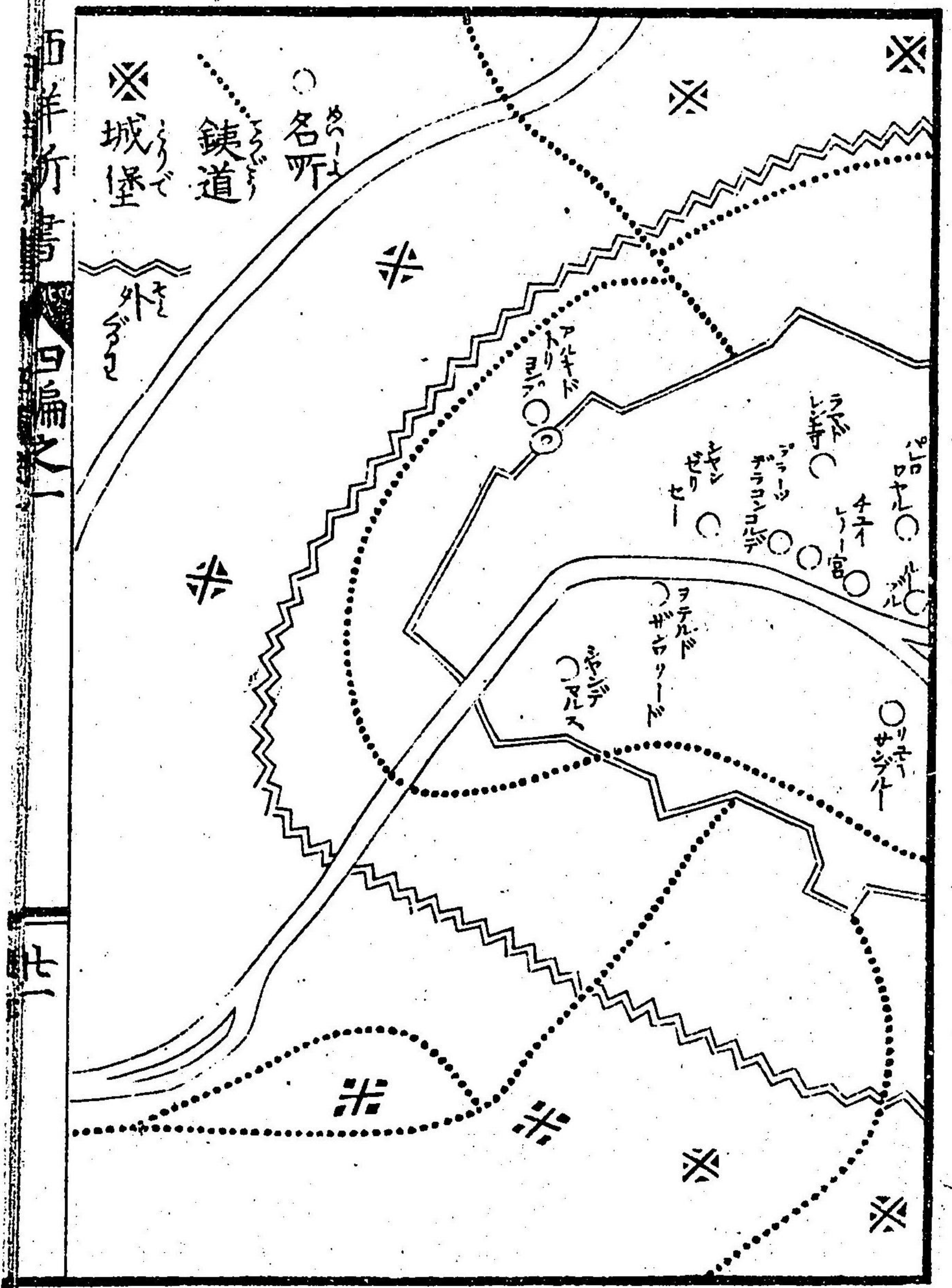
生ずると言ふてありて杉  
 とうの良材もんえず櫻の  
 折々あり元山へ尽く木と植  
 つけ草みさる地へ草とまいて  
 野飼ひの牛羊の食料と  
 すあり然れども地味悪く  
 寒さ強き草木共小生育  
 十分ふに至らば地とを修築  
 して置る人負多くて世話  
 能届くの故あるべし

○巴黎斯の説

巴黎斯の仏蘭西全国の帝都にして塞納河の南岸と北の岸とを跨り北の方の市街南より稍廣一府の中東西南北とも二里と出ずとりども家の普請の六階七階の高さと極め造作の麗いと市街の華美なるの英吉利の首都倫敦府とつども及ばぬ実の世界第一と称すべし往来の所々を丸を取らるる廣場ありて其所より諸方へ道と通ずる故曲り目の隅々より三角を造り一家とてり塞納河へ鑿の橋或は石の橋と三十三ヶ所架して往来と南北を連接す

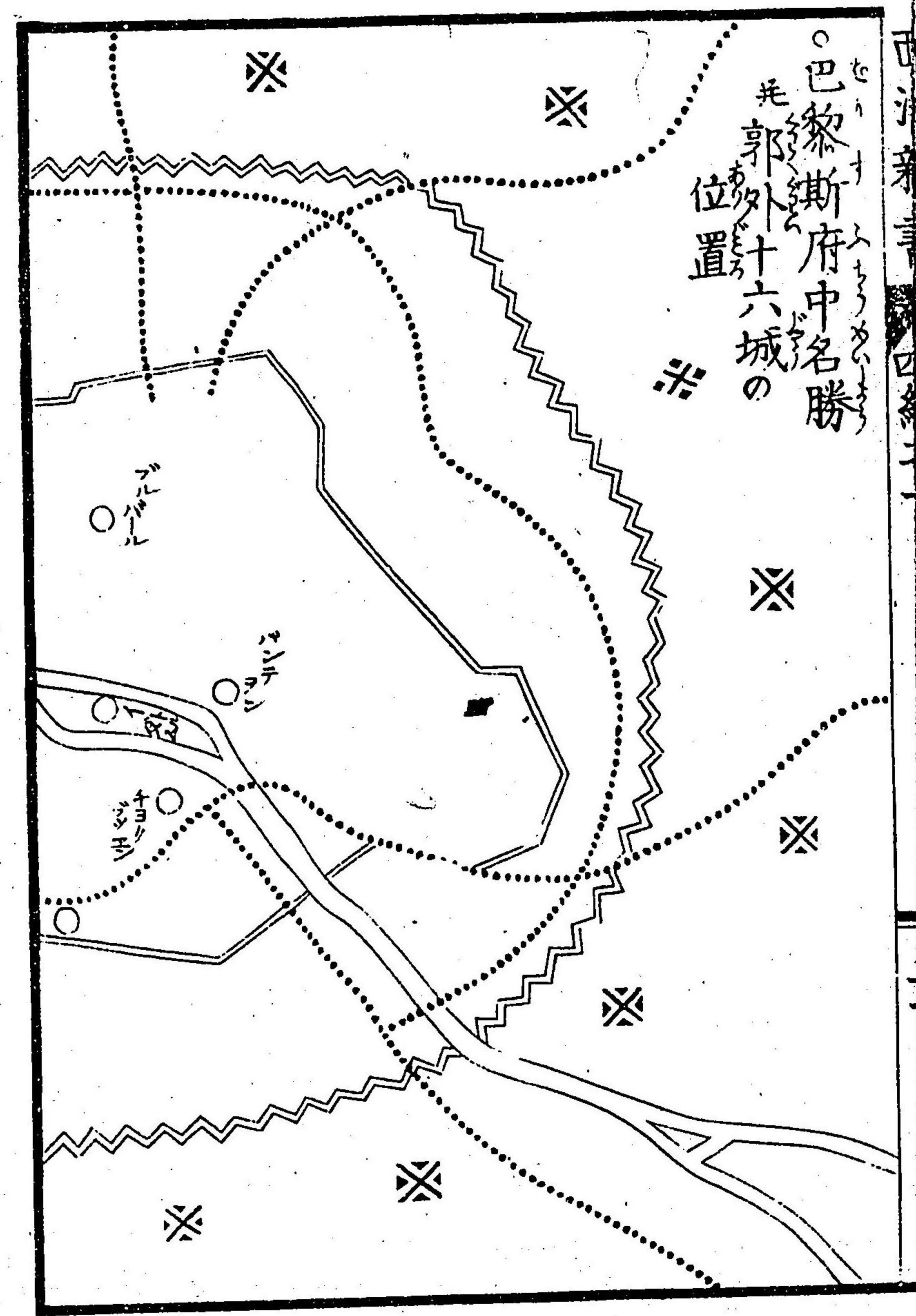
府外の周圍より山道に築きしる郭と設け其まゝ外より十七ヶ所小城と構え府中の要害を備へり

巴黎斯の大圓城郭及び郭外四圍の十七城と造築せし人の十八世「路易」王の全權宰相にして方今共和政治の二代目大統領と仰ぐ「チエール」とり人の繩張にして千八百四十年今より三十二年にお小普請を始め五年め小て成就すは十七城小く一昨年中普魯士國の大兵と防禦し和睦あるまで敵としく更小府内へ入るといめざるは以てその造築の堅固あるを知るべし



西洋新書  
四編之一

七



西洋新書  
四編之一

七

抑當府の羅馬国の元帥該撒の時代より一ツの小街を  
 ぬせが国祖哥羅味王羅馬の兵と追をらひて紀元  
 百八十一年今より千六百九十二年おの地と以て首都とせ  
 一より追々開け七百五十二年今より千百三十一年より查  
 爾禄曼帝お至つて市街すくお繁昌とぬり千六百四十  
 三年今より千二百十九年お十四世路易王のとき宮殿樓  
 閣市街の造築百事善美と尽せるの後千七百九十九年世  
 拿破崙帝位お昇り是と増加し近來まゝ種々お市街の模  
 様と愛華一華美艶麗至り極らずと言ふとぬり市街  
 割お合しつての廣からずとぬりとも六層七層の家居二階

三階お住むものと四階五階お住むものと六階七階お住むもの  
 と何れもその世帯違ひ下が山城屋ならん中が武藏屋  
 上が津の国屋とりぬ松を訳ぬる都の上へ都と重ね乗  
 ころが如し  
 二階三階のところがぬり身代宜しぬり住と六階七階  
 の上おぬりその日稼がの貧しぬり者るど住むぬりこの府  
 内の大家の者とりぬともぬり家作稀ぬり多ぬり  
 借屋あり一ヶ年の店賃百二十兩より四千兩余お至る  
 ものあり百二十兩以下の店賃と拂ぬりぬり下等と  
 ぬり最貧しぬり人のぬりぬり

巴黎斯府小の家税とりよめと採り立るあり繁華の地と塲末とい家税一様なるうずとしくども大約店賃一

ケ年小	二百兩以下の家ハケ年小税銀	二十兩ニ付	三十六匁
	二百兩以上の家ハケ年小税銀	二十兩ニ付	四十八匁
	千兩以上の家ハケ年小税銀	二十兩ニ付	九十六匁
	二千兩以上の家ハケ年小税銀	二十兩ニ付	二百四匁

ケ年の店賃百兩を拂ふ者ハ毎年一兩二分と税銀として政府小収め是と下等の民とあり六階七階の町小住居するあり

府内と三大區小別ち北の町と「カイル」と号け中の町と「テ」と称し南の町と「ユニウエルシテ」と呼ぶ然りと町と二十街小分ツ一町毎の人口左の如し

第一街	七万七千八百三十一人
第二街	七万七千六百七十一人
第三街	九万六千四百四十二人
第四街	九万六千三百四十一人
第五街	九万八千二百十三人
第六街	九万〇八百〇三人
第七街	六万八千八百八十三人

- 第八街 七万五千八百八十人
- 第九街 十万〇二千二百十五人
- 第十街 十四万四千四百八十五人
- 第十一街 十八万三千七百二十三
- 第十二街 十万〇〇七十七人
- 第十三街 七万九千八百二十八人
- 第十四街 八万二千百人
- 第十五街 九万二千八百〇七人
- 第十六街 四万四千〇三十四人
- 第十七街 十二万〇〇六十四人

- 第十八街 十五万四千五百十八人
- 第十九街 十八万三千七百十六人
- 第二十街 十万二千二百二十九人

總計 二百萬〇五千七百〇九人あり

市街の割より人別く多き前おも言へるが如く日本  
 東京の裏店住居の類ひは皆高樓小世帯ともち都  
 とニツ三ツ重ね合せし小似るが故ありまゝ巴黎中小

- 馬の数 合して 八万頭余
- 猫の数 合して 二十七万八千頭余
- 新聞會社 四十四軒



新聞紙と賣りの往來の辻々小三尺四五寸四方  
などの箱番屋の如きものと拵置その中居て  
是と商ふる我國の屋代凡世の類と同一

市中と往返する相對貨錢の

馬車

三万輛余

馬車の東京の駕籠屋や人力車屋と同一と云ふ馬車屋  
一言付て雇ふもあり辻の人力車の板小途中にて乗るも  
あり貨錢の一時何程と極め或ひ道の遠近なくも極る  
あり乗合の馬車に往返の道筋と定めある一日も幾度も  
同一道と操り居るものなく人数二三十人も乗すべし

大車より乗合の人の途中  
より乗り途中より下るも  
有り銘々の都合任せるも  
と貨錢の半分多るも皆乗  
るも同一價ふてあるもの車  
の貨錢の割小ふると甚る  
安一総て途中にて馬車  
の多るもの馬車の番号を印  
せ紙あるもの紙へ多る連  
段と附させ是と採り置る

乗合の馬車



然すも其の車の中へ忘る物として彼の番号の札をもち馬車會社へゆきて尋ね採り落しぬの忽地不出る

荷と積む車も人の力を勞せず矢張馬引す車の人

の乗もの輿をくく餘の飾りと附ぬる市中取締りの役人ハセルギアンドビルと言ふありて我國

の選卒ハ同バ巴黎斯中の惣人数

「セルギアンドビル」 二万六千人

右一人ハ付一日の給料四十二匁より四十八匁と言ふ

「セルギアンドビル」の人三尺余の棒を持ち昼夜巡邏して

市中一町の向ハ二人ハ絶ぬる

喧嘩口論ハ置て唄とく高声を奔一莖杖と捨道の

の傍らの花と折みど道路中一切の事ハ関係する故

小生醉ありて往來と滄浪つと居まハセルギアンドビ

ル來りて有と云せず屯所へ引連往醉の醒ふまで

ハ表へ出さざるハ役人の所々屯所ありて其処より

出張るハ別ハ足張の板の物ハ置ず

府中或ハ府外より乗出ハ方ハ往の蒸気車

鍊道 八條

蒸気車の事ハ亞米理加の條下小説にまて英吉利

の龍動ふ出せの度あ省く

帝王の居呀「チユイロリー宮」今より三百六十年ぶ加他  
 隣馬的斯后の造宮ありて其後背ふ廣さ方正の地と  
 隔く有る「ルーブル宮」十四世路易王の造築せし所あり  
 両宮とも小一世拿破崙帝小至り増補と加え二宮と  
 接えく一連と為せり「チユイロリー宮」前面の當府第  
 一の市街やうく左に「塞納川」の流と帯り大門の入り  
 口あり護衛の兵卒砲と肩ありて立ち門内の石を以て敷  
 つゆ諸人の往来するごと許す右の方の長き鉄垣根也  
 中程石の門あり門の上小獅子と石あり彫刻と置り門の

正面の最廣さ空地と彫下と漆食敲さふる中央小  
 噴水器掛りりり

噴泉の王城と始めりく巴黎斯中の逍遙場まゝ丸  
 く取くる市街の廣地の中央まゝと合して三十三ヶ所  
 あり地の上或ひ池の中まゝといふ洗鉢の如きものより  
 吹揚らすありけ王宮の中ふ有るもの地上より十  
 五間の高さ小噴昇らすといふ人といふ是れといふ  
 と打つむ然ととも仏蘭西中第一の噴泉と為るも  
 のの當府より六里ほどと隔く地の「ウエルサイル城」  
 の飛泉ありと言ひ

威爾塞列の宮殿は往昔路易王代々の都せし所ありて  
 是れ結構壯麗と極めしり當時の宮中におい仏蘭  
 西国歴代にお有りし戦争の圖と名人巧手お模写さ  
 せしものと藏すその画宛然真の戦場と見るが如しまた  
 古画珍画の類と數限りなく蓄へおけり宮殿の四圍  
 におい千歳の大樹掩ひ茂り園の中におい池水の流と  
 繞らし所々お神人の像また海獸などを石にて彫  
 りて置き噴水器ありて水を吹揚らすと十丈余  
 玉の柱と數本集めて建たる如し水と操るお蒸氣  
 の力を以てするよし是を當國の第一の噴泉とす樹木の

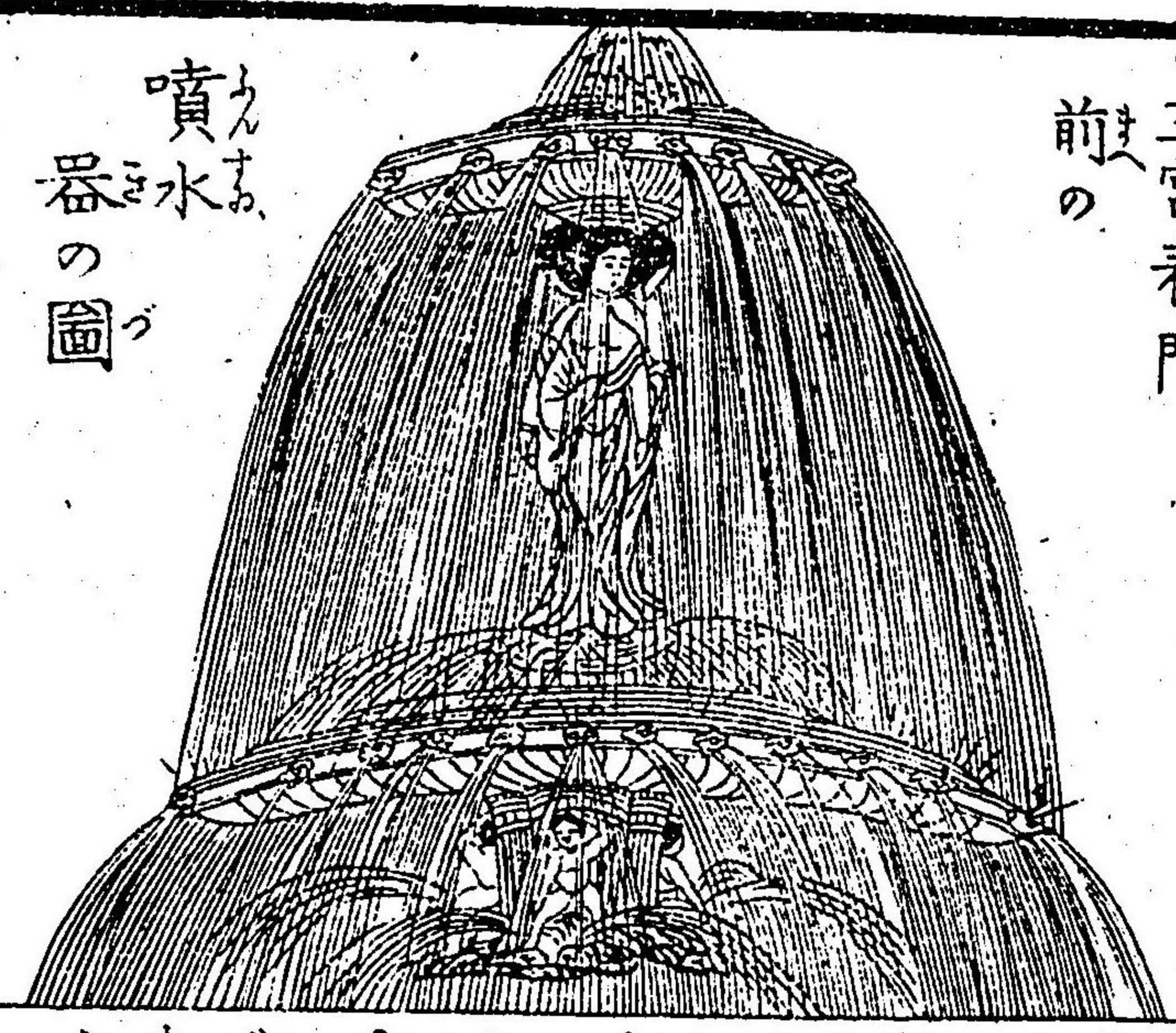
蔭を背くる池水の流との潺湲とる景色極めて幽致と  
 ば夏日へ往ら暑氣とさけ涼と探るの遊人との  
 ところお来ると以て蒸氣車の往返終日絶ると  
 あり

廣地の内へ掛連ねたる瓦斯燈數百と以ておぞふと  
 暗夜といへども明るさと益るとあざむけ人の魂魄とて  
 涼しうせむまゝ一ツの門と入ると石と敷詰る廣  
 場あり正面の館の屋根お国旗と建玄関めらる所と  
 入ると左と右お石の階ありおの家居二階三階造り  
 おいて廣さ十間奥行六十間おの構えあり外部の

種々の彫鏤ある大石より築ら内部の黄金珠玉を以て脩飾しつる造作その華美艶麗ある尽さる所あり実世東第一の宮殿と言ッべし是則帝宮あり「ルーブル宮」も華美同断の造築ありて當時の寶藏の如く古器名画初代拿破崙の衣服諸道具各国分捕の品々軍艦の雛形ありあり画と好めるもの詩と受く是と摸写する事と得るあり又王宮の中ふ廣き園あり樹木掩ひ茂りて処おも噴水ありて泉池の中央より吹昇より「ルウブル宮」の諸物まゝこの庭園中よりいさゝか自由な花歩する事と許せり

「シヤンゼリセイ」博物館の側ふ「パングラマ」と言ふあり直經十間ほどある圓作り堂あり伊太里と澳期利と戦争のとき仏国伊太里は加勢して澳期利と戦ふはる戰場の油画あり樹木遠近は掩茂り山道高低は出沒せしうち澳仏の兩軍入りて戦争盛んする体と摸写する事あり其さま火の燃んとあつて血ハるがごとくと疑ふがごとく書得る事あり実な戦争中ふ在るがごとくとわせり堂の上り口は番人ありて見物のとのより一人が三々六と取り爰は昇す持物あるがごとく番人は預るあり

王宮表門  
前の



噴水  
器の圖

「ナショナルと言ふ文庫あり印  
行の書九十万卷餘も写の書  
八万卷餘も古書貨幣の  
種類と蓄ふ歐羅巴中第一の  
書藏とす仙蘭西人言ふナ  
ショナルの文庫の書と一列  
て並ぶる時の長さ七里あり  
べ」と  
凱弓とら最宏壯なる高閣  
あり初代拿破崙の造営と

イ、め千八百三十八年今より三十四年おほやうや成就  
をせしと言ふ初代拿破崙埃斯利伊大里とらとの戦  
争に勝その偉功と後世に傳んとくけ造築とすめ  
りのめて閣の外まづりの種々の神像まゝの古代有功の  
人物あるの拿破崙が勝戦の図をどと鑄る石とりて築  
立りのめて間口十間奥行七間高廿五間二尺あり  
閣の下四方お口あり通行自在をらむ日と限りて  
人の閣上お登ること許す登るりのより一人お三女六ト  
と収めさす閣の下左の方お入り口ありて石の階と  
螺旋登ると二百八十五段ありて閣の頂上お至るる処より

四方と眺望す正面大路と直ふ十八九丁に渡り遙々小  
 王宮の門に對す景色画圖の如し背面もまた街と二  
 十丁ほど糸と伸るがごとく小に渡り中を塞納河の鉄橋  
 あり河水遠く府中と貫ぬる小舟そのうち往來す  
 る木の葉と蒔る如くまり河に添く二基の高塔  
 突立す

是は「ハートルダム」と言ふ寺院ありて當府下の第一  
 等とす造築は古代の物あるより高く是ゆる前面  
 小あり二ツの塔ありて塔の頂上の普請りまご出来  
 上らざとしく目と驚らすの壯觀あり

又左の方小當りて高く聳ゆる一寺院あり

是は「パンテヲン」とりて寺院の圓塔ありて高さ二十間  
 余ありとりて普請の希臘国の築造小ならひ奇功  
 と尽しる物ありて歐羅巴中を指と屈して筆ある  
 の奇觀とす

此の閣上洛中洛外一ツとして見ゆる所をけと一々  
 記す小違有らず風景の美眺望の麗よりさし推して  
 知るべし

博覽會場ハ塞納河の傍りあり館の築造ハ楕圓形中  
 へ廣大壯麗あり四方小門あり内部外部と分ち順々小

路と通下を覧する小便るうむ抑博覧會の英吉利  
 の首都倫敦小於千八百五十三年今より十九年お  
 小催せりと初めり一仏国まゝ是小倣ひ千八百五十五年  
 今より十七年おあの會と催一英國まゝ千八百六十三  
 年今より九年お第二の會と催一仏国まゝ千八百六十  
 七年今より五年おあの館小催ふせりと博覧會の第一  
 等とす此館の総地面凡十二丁四方などの潤さふりて築  
 造の入用百四十万兩をど掛りしと云ふ博覧會小當  
 り歐羅巴各国の勿論亞米理加勿亞細亞勿すぐ小日  
 本もどよりも出張せりやどなれば府下の繁昌しとある

小物一とてふ一髪結所  
 の主人の混雜小乗一金  
 色小染する毛を以て假髻  
 とするものと持めりし小あひ  
 しく流行して已ぶる十日  
 の間小千四百兩の金子を得  
 りりと言へり髪結店すら  
 る會有りてその利は片  
 るト斯の如くいんや大商  
 小於やや當時の物價総



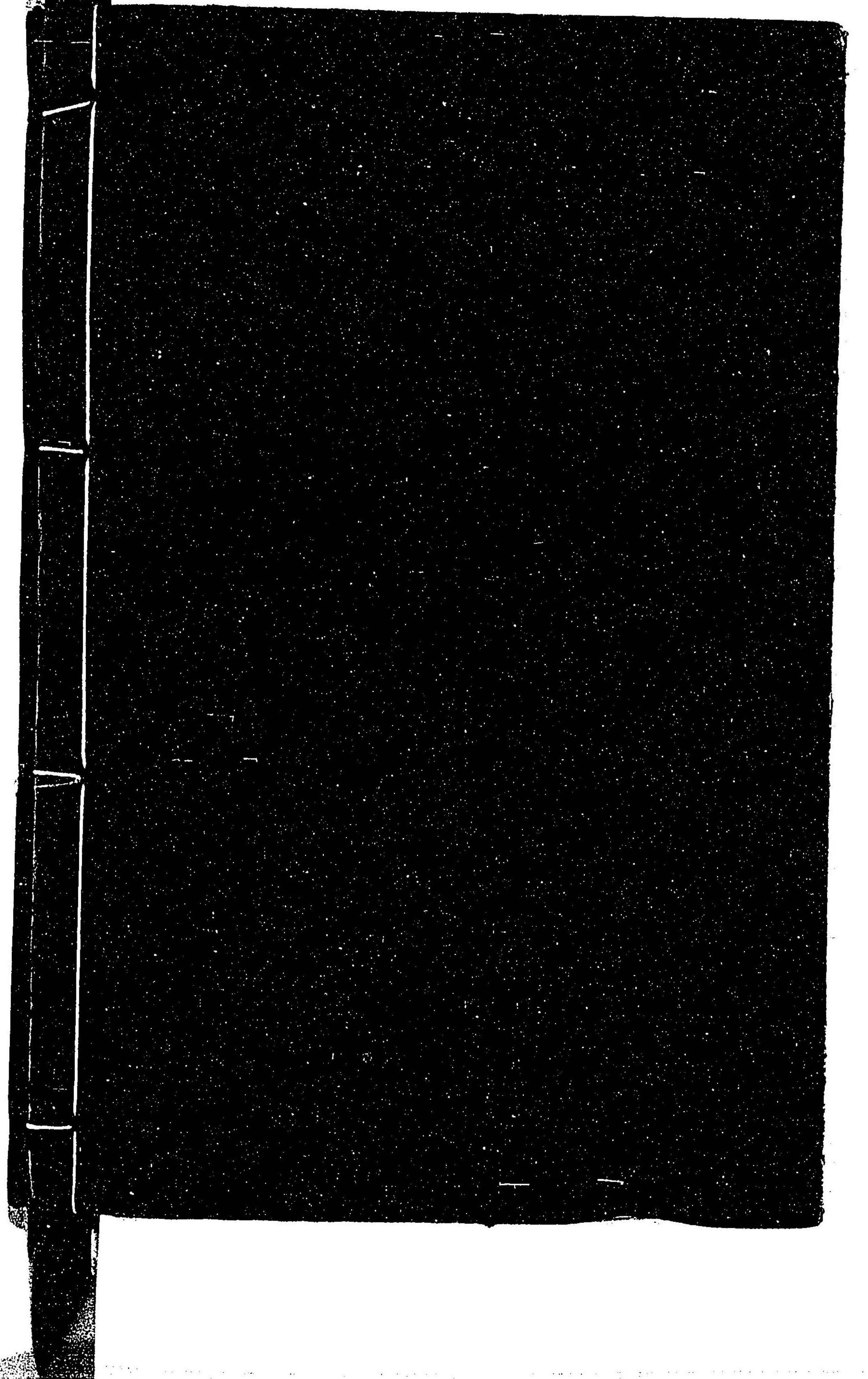


て平戸の五割増一ありとぞ  
 旅店の盛大より且華麗なるの府と以て世界第一と  
 称すべしその廣き家おろろりて一方一町おどおし高  
 さ八階おろろ座鋪の數一千余間お過さ諸事艶麗  
 便利と尽さるる一実よ驚くべきの造築めて旅客  
 常小二千人もさるとまふ  
 旅店の事へ亞米理加の條下お説りものと大同小異小  
 一層の美を加えたるの事あり  
 旅籠屋の中寄宿の者さまりて雑沓まとい爰よ  
 宿と投ずるものいまが足せの帳場おゆきて我が名

まて記させて後座敷の入り口の鍵と請取宿の者小案  
 内と致させ我が借る者さるる通るありなりとの口ぬ  
 一ト間と小番号と附とるる其番号と能いおかえ  
 て忘るぬやうおぬけべしと出入りの度毎おれり  
 の戸口の錠いふと却すと肝要あり諸方の者打  
 集まり混雜のところさるる荷物などの紛失する  
 事といひ言ひ難かるべし但し〇の字の印りある入り  
 口の雪隠ありと心得べし  
 旅籠賃の上中下の三等ありとるどもの一日の賄ひ  
 大抵二三兩位より下ふらりといひ三分も五分二

朱むらねと止りとす然も此ツの上り下り  
時の相場の物價も随ふと有とい何時も平等  
への往が

西洋新書四編上終



特31  
671  
館籍  
室  
一  
四  
冊  
號  
架  
函  
275  
332

022031-007-2

特31-671

西洋新書

瓜生 政和/編

M5-8

ADA-0348

